和漢圖會集　山田流

下の巻

249
5
79

琴歌全集

〔山田流〕目次（下の巻）

松上鶴 一
草以の盃 二
月の詠 三
桜山八景 五
四季の遊 六
四季の遊 八
居待の月 一〇
松島八景 一二
朧夜 一四
松の壽 一五
春の榮 一七
近江八景 一八

磯山 二〇
松風 二一
四季の友 二三
壽くらべ 二五
まがきの菊 二八
菊水 三〇
阿古屋の松 三二
臼の聲 三三
四季のすさび 三五
常磐 三七
小督の曲 四〇
熊野 四三
清華園 四六

松上鶴 四九
忍ぶ草 五一
十津川の曲 五二
伏見 五五
足柄山 五七
四季の富草 六二
雨夜の月 六五
須磨の嵐 六九
祝ひ歌 七二
祇王 七四
田植の幸 七七
御旗の動功 八〇
國の基 八四

奥歌物
内交
45. 7. 16
内交

三九年川春の曲　八七
三九年川夏の曲　八八
三九年川秋の曲　八八
三九年川冬の曲　八九
花の雲　九一
旅順閉塞　九二
竹生島　九五
賴光　九九
石山源氏上　一〇六
石山源氏下　一一〇
長恨歌曲　一一三
葵の上　一一七

奥手事物

茶の湯おんど　一二四
都の春　一二五
名所土産　一二六
末の契　一二八
東獅子　一二九
嵯峨の春　一三一
さらし　一三二
岡康碪　一三四
四段碪　一三五
松竹梅　一三五
根引の松　一三七
西行櫻　一三八
若菜　一四〇
松陰の月　一四一
替手八千代獅子　一四一
替手四段砧　一四一

京風物

夕顔　一四二
新道成寺　一四三
楫枕　一四五
磯千鳥　一四六
四季の詠　一四七
里の曉　一四九
宇治めぐり　一五〇
七小町　一五二
新青柳　一五三
新高砂　一五四
千鳥の曲　一五五
春の曲　一五六
秋の曲　一五七
五段砧　一五八
雪中竹　一五九
御國の譽　一六〇
替手新高砂　一六一
替手五段砧　一六一
替手雪中竹　一六一
替手御國の譽　一六一

《終》

琴歌全集〔山田流〕下の卷

石井松清撰

奥歌物

松上鶴（しようじやうのつる）　琴雲井調子　三絃本調子　琴一　三絃一合　四世山木作

御製

朝（あさ）づく日（ひ）豐榮（とよさか）のぼる山松（やまつ）の
梢（こずえ）をしめてたづぞなくなる

しようじやうのつる

皇后御製

巣籠のひなの千代をもさゝぐとや
みかきの松にたづのなくらむ

威仁親王

かみぢ山いはねの松に千代よばふ
たづの聲こそたかく聞こゆれ

喜久の盃

琴三絃　雲井調子三下り　琴三絃一合　中能島松聲作

足引のツレ山路の菊や山人の。千代に榮ゆるしるし

とて。眞垣に見ゆる色々の。花の錦は乙女子が。月の鏡に影うつす。姿やさしきませのうち。合ワケ袖にとめこすうつりがに。なびく黃菊か白菊の。心のそこのみだれ菊。ついとかされてまろび寢の。夢かうつゝか白露の。おきてわびしき手枕は。兒童が爲のかこちごと。幾千代も合幾千代と。かはらぬ色の黃金菊。茂れるやどの賑に。くめどもつきぬきくの盃。

園の詠

琴三絃　半雲井三下り　琴三絃一合　中能島松聲作

そのゝながめ

シテ君が代のツレ千代の節ある竹芝の。浦こぐ舟のほのぼのと。雲井に見ゆるあわのやま。神野のたかねもしめゆへる。まがきの山と朝夕に。見渡し給ふ我君の。合

三絃本調子 かざしとにほふ梅の花。笠にぬふてふ鶯の。ワケ聲うらゝけき御園生の。ワケ霞の間より糸櫻。ワケかよりかくより玉だれの。ワケみすの吹く風も世に知らぬ。ワケ香に匂へればいや高き。ワケ軒ばにしげる楠の木の。シテ千枝に五百枝に神さびて。立ちさかえつゝすぎにけり。合二上リシテ年もしられず久方の。月の三崎の龜山は。ワケ蓬が島のこゝちして。空にすみゆく松の風。合ワケありその浪の緒にすげて。ツレ君萬代にひきやつたへむ。

葉山八景

琴三絃 雲井調子 琴三絃本調子 四世山木作

シテ春すぎて。ツレしげる葉山の月かげは。秋かとばかりさやかにも。シテみえてすゞしき白石の。海原かへすまほかたほ。ワケ浪路はるかに見渡せば。ワケ江島の夕日かゞやきて。ツレ浦のみる目もおもしろや。合入上リシテ森戸の神のかみがきに。かゝるみしめもうごきなく。ツレゆ

たかにはるゝ朝あらし。ワケ思ひくるわにかきならす。琴柱におつる雁がねの。ワケ淋しさそへて川尻の。鐘の音くもる入相の。ワケむかふたごひの雪深く。ワケつもりつもりてくれはつる。あはれ重ねて宇が崎の。ツレ夜々ふる雨の音ふけて。かたりあひたるたびの友船。

四季の遊

琴三絃三　半雲井調子琴三絃一下り　合三代目山登松齢作

前弾シテ新玉の年たちかへる朝霞。ツレたなびかれゆく小松原。野邊の遊も初若菜。梅が香さそふ春風に。鶯きなく軒のつま。合シテ花の香に。そめしそめじはきのふにて。苗代水もゆたかなる。合ツレ蛙なきたつこゝかしこ。シテ紫匂ふかきつばた。ワキ同じゆかりの藤つゝじ。合ワケかくばかり。寝ぬ夜重ねてまつものを。ワケなど時鳥つれなくも。三絃本調子合シテはや秋風の吹きさそふ。ワケ星のゆふべは家々に。シテなびく若竹たんざくの。ワケ色の千草の花盛り。野邊はむしの音かずかずに。ワケわけつゝ遊ぶ二度の月。シテ賤がきぬたの音すみて。合八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ初霜むすぶ神無月。時雨と共に散る木の葉の。池の氷

に水鳥の。シテうき寝をわぶる夜なくの。寒さわする丶埋火の。合ツレ光のどかにたが門も。とし木のまつに春やむかへむ。

四季の遊

琴一　雲井琴一　三絃一　三絃本調子　四世山木作

シテこれやこの。ツレ行くも歸るもわかれては。知るも知らぬも諸共に。春の遊ぞよねんなき。シテ青柳の糸くりかへし詠めても。猶くれ殘る春日かげ。ワケ糸ゆうふけて立ちわたる。霞をもれてほのぼのと。ワケ櫻に匂ふ山鳥の。なが〳〵し日もあかぬ間に。ワケ若葉色そふ夏山の。蟬の衣のうすものに。シテつ丶みかねたるしのびねを。たれにもらしてほと丶ぎす。名は橘のなつかしく。ツレかをりあらそふ空だきの。うちやゆかしき玉簾。ワケ千草が露に鳴く虫も。夜寒の床を思ひやり。ワケつゞれさせてふ秋の夜に。砧の音さへ澄みわたる。ツレ月をよごろの友として。うちやあかさむ。八、一律上ル九、二律下ル三絃二上リ おもしろや。物の音の。物の音のさえ行く夜半はこがらしも。みぞれも松におとづれて。さつさつの聲かぎりな

き。四季をりをりのたのしみも。つきせぬやどこそ久しけれ。

居待の月

琴半雲井琴一三絃三下り三絃一合　中能島松聲作

前彈シテあし田鶴のツレ千歳の齢ながかれと。たのみしことのいかなれば。まだ肌さむききさらぎの。居待の月の影きえて。面影したふぬばたまの。やみのうつゝの人心。それかあらぬかまぼろしの。夢ばかりなる寢屋の戸を。あだにとひ來る月はうらめし。合シテ月は恨めし。ほのぼのと。曉つぐる鐘の音。ワケ常聞くよりもあはれなり。軒端に馴れし鶯の。ワケさへづる聲もたえだえに。シテ落つる涙に春雨か。ワケ名殘の露のおきて忍び。ワケふしてまろびて物うさは。シテいやまさり行く敷妙の。ワケ枕にかよふ梅が香に。薫あらそふたきもの。合ワケ煙は雲と長き日の。ツレ菅生の山にかゝるらむ。本調子合琴入上リ

九下リ三拍二上リ　ツレ戀ひ〳〵て。戀しき君を待乳山。シテまつかひもなくいたづらに。ワケ岩木の濱のしき波の。ワケ返らぬものを海士の子が。シテ鹽なれ衣ほすまさへ。ないてあ

かしのうらめしき。合ワケゆの手ゆかしき玉琴の。合糸の調の音もたえて。むなしきまどに松風の。ツレ聲ばかりこそ殘りけれ。合大上リ斗上リ三絃三下リ ツレ實に人の身は浮雲の。うきつしづみてさだめなき。空蟬の世ぞはかなかりける。

松島八景

琴 半雲井 三絃 本調子　琴 三絃 一合　山勢松韻作

前彈シテ海山も。ツレたりとゝのへる日の本の。四方の國には昔より。合音に聞えし名所も。數多あれども吾妻路の。道の奥なる松島の。月雪花の詠には。しくものぞなき梅が浦の。春の景色の面白く。合空も長閑にうらうらと。シテ霞が浦にたち渡る。ワキ霞をわけてかへりゆく。ワケ雁のひとつらあはれあはれ。シテいかにとゞめむ暮れてゆく。ツレ春のかたみと咲き殘る。合シテ江のあがたなる櫻花。ワケ色香もふかし深綠。シテ小島松の夕日影。ワケシテよる白浪に照りそひて。ワケはるかに見ゆる鹽がまや。シテ千賀の浦和のあまがやく。ツレもしほの煙末はれて。合ワケ月松島にくまもなく。ワケさしづる影のさやか

にて。シテあないひしらぬ詠やと。見るほどもなく山寺の。（八、一律上ル九、二律下ル平調子）三絃二上リ曉つぐる鐘の音を。つくづく聞けばいとゞしく。哀ぞ勝るうば玉の。くらき夜もまたちひろある。竹のうらわに降る雨を。起きふし聞くも靜にて。合げに面白きところぞと。見れども見れどもあかぬこのしま。

朧夜

琴 雲井調子 三絃 三下リ　琴 三絃 一合　山登萬和作

前彈シテ花のツレ盛に暮れかねし。ワケ夕の雲はいつしかも。ワケ朧月夜となりにけり。ワケ二ひら三ひら散る花の。シテゆくへおくりし春風は。ワケ柳に入りて跡もなく。シテ靜にふくる高殿に。ワケ誰まつほどの手ずさみぞ。ツレねもころころの琴の音。

松の壽

琴 半雲井 三絃 三下リ　琴 三絃 一合　中能島松聲作

シテ六の花。ツレなほ十返に一年を。むかへ目出度き御代の春。若葉に返るこよみこそ。幾世へぬらむしほりかな。シテかしこき文のあきらけく。ワケひらけすゝむや四

の海。ワケ浪のつゞみのさゞんざに。ワケ樂しく住める國民の。シテわきてみさをの松のもと。樂シテつたなきわざの糸竹も。ときはかきはの君たちの。びくてめぐみに葉も繁る。合ツレ山のゐがほにワケのこんの雪の。ほんのりと。ワケ中に色どる紅梅は。シテかはいらしいぢやないかいな。ツレをさな心の春遊。はづむ手まりの一二三。三のあさかすみ。合ツレかのもこのもにつくはごの。兒にあふいて三日月のてり。かつらの君のおとしはいくつ。ことのねかよふ糸の曲。合本調子後二上リツレ實に此曲のおもしろや。なほくれ竹の千代八千代。ちぎり久しき松の壽。

春の榮

琴三絃本調子　雲井

四世山木作

シテふきおろす。長白山の風さむく。草木みながらかれはてゝ。シテありなれ川のあつ氷。いつとけむとも白雪の。ワケつもりしらみ日の本の。ツレたかき光にとけそめつ。雲たちさわぎし崑崙も。シテ大内山の山風に。吹きくづされてかげろふの。ワケもゆる春日となりぬれば。

ワケ梅はほころびワケ柳もゝえ。こがら山からなきかはす。ワケ聲きゝながら君が代を。ツレ千代と歌ひてもろこしの。はらのわかなもつむべかりけり。

近江八景

琴三絃本　半雲井調子調子

山登萬和作

前彈シテ春秋の。ツレながめつきせぬにほの海。霞のひまに見渡せば。ワケ波のあわづの雲はれて。ワケ千ふね百ふね打出の。ツレはまをあとなる追風に。三絃三合下リシテまほあげかへるやばせがた。ワケはや夕日さす浦々の。景色を見つゝわたるには。瀬田の長橋ながからず。ワケ詠むるうちに三井寺の。入相つぐるかねの聲。三絃本調子合ワケ比良の高根は白雪の。シテやゝはださむきうら風に。おつる堅田のかりがねも。ワケ數さへ見えて照る月の。影もさやけき石山や。シテむかしの跡のしのばれて。夜半の時雨もからさきの。ツレ松には千代の聲すなり。合八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ君がみいつのあきらけく。治まる御代にあふみ路や。合名にきこえたる八の名どころ。

磯山

琴三絃 雲井調子　四世山木作

ツレ昔より。シテ小磯のこゝを城山と。ツレいひきたりしかば。ワケあたらしくつくりしこの庵も。そのまゝ城山亭と名づけたり。ワケ月雪花の風景を。シテめのまへに見海づらひろく眞帆かたほ。ワケたえず行きかふ大磯の。ワケ松の木の間にけぶりなびきて。汀によせかへる沖津波。ワケ沖行く船も手にとるごとく。ワケ小田原。ワケ國府津のあたりより。ワケ江の島の。ワケ波間に浮べるさまえもいはず。ワケまた折にふれては。濱邊に出てゝ。小石貝などッレひろふもいとおもしろし。濱の眞沙地さやかにも。照る月影のまばゆくて。ワケいさりの船のかゞり火も。かげ賑しき磯べかな。シテかしこき君の此の庵にたちよりまして末ながく。ふきつたふべき松風の。琴のしらべにあひかよふ。聲いやたかく萬代と。うたふ御代こそたのしけれ。

松風

琴半雲井調子琴　三絃本調子三絃　一合　三世山木　中能島松聲　合作

シテ久方のツレ月のかつらのかげたかく。風吹きおくり

まつかぜ

まさごぢを。みがきなしたる光をば。ひるかとばかり見わたせば。花も紅葉もなかりけり。合浦のとまやに秋ふけて。うちもねられず海人は。しほなれ衣袖さむみ。きぬたの音もうらみなり。合三絃三下リとふのすがごもみふにねし。ワケ昔しのべばわりつめの。シテわりなき中も中々に。合ワケ何うらずりのうらみごと。シテ袖はなみだのなみがへし。ワケかへるたもとを引れんに。ワケ秋の夜長し長かれと。シテなごりは盡きぬつくし琴。うみとよぶなにゆかりある。三絃三上ルッレいそべのまつを吹く風も。

合おのづからなるしらべには。ワケ雲井の雁も琴柱して。おつるまにまに聲そへて。シテ心をすますなみの音。入上ルッレ秋風樂やこれならむ。樂八下ル合八上ル九下ルおもしろや。松風のしらべそへたるたま琴は。千代のためしに引く糸の。合ながきよかけてつきせじと。八百萬代も三笠山。君がめぐみやあふぐらむ。

四季の友

琴半雲井琴 三絃本調子三絃一

山勢松韻作

長閑なるッレ空もうらゝに明けそめて。霞たちけり四

しきのとも

方山の。梢に匂ふ梅の花。ながめて行くはゆかしくも。
谷の戸出づる鶯の。初音をつげて君が代を。千代萬代
とうたふらむ。合ワケいつしか人の心さへ。ワケ花のさか
りの隅田川。ワケさをさす舟のかずかずに。ッレにぎはふ
春のながめかや。合ワケきのふとすぎていつの間に。ワケ
青葉になりて雲井より。ワケ一聲なのる時鳥。ワケあとを
したうて山里に。ワケわけ入り見れば袖がきに。ワケ雪か
と見えてしろじろと。咲きみだれたる卯の花や。ワケは
や秋風の立ちそめて。ワケ野邊もさやかに照る月の。ワケ
光になびく初尾花。ッレ千草の中に松虫の。ッレ聲おもし
ろくみすの内に。かきならすなるつま琴の。ワケ音にあ
はせつゝよもすがら。ワケあかぬすさびのたのしさに。
ワケ千代をかさねて色かへぬ。ワケ松の常磐にふる雪の。
ワケ花かとまがふみよし野の。風情は四方にたぐひな
き。ッレ實に豐年のみつぎもの。合壽祝ふ世のしるし。目
出度かりけるしるしかな。

壽くらべ

琴牢雲井調子琴　三絃本調子三絃　一合二世　山木作

ことぶきくらべ

前唱シテ壽はしゆんざんにして千歳ひいで。またさう海のッレかぎりなき。南の星の影ひたす。岩根の浪の名に高き。天の橋立ふみも見ず。ワケみづのえといふみやびをあり。シテ月雪花のをりをりに。都の手ぶりうとからず。ワケ心もかろき春風に。ワケ釣棹とつて青柳の。糸くり出す一葉舟。ワケかつをつり鯛つりほこり。七日迄。家路わすれて住の江や。ッレ浦わ遙にこぎ出てぬ。合シテアヽいぶかしや。まさしく釣りしは龜なるを。ワケいとやんごとなき上臈の。をればこぼるゝ笑のつゆ。初花ざくらに鶯の。初音そへたるばかりなり。合斗二律上ル三絃一二律下ルシテ我は斗二律下ル三絃一二律上ル本調子そもたつの都のものなるか。君をともなひ申さむ。ッレいざもろともにと浦島は。とこよの國にいたりけり。樂八、一律上ルシテわだづみの。わだつみの神の宮居のうちのべの。ッレ妙なるうちにいつまでも。思ひなぎさに。うちつれて。貝やひろはむ。玉やひろはむ。合九、二律下ル三絃二上リ君がえにしはむらさきの。ワケ深き色貝千種貝。ワケたまのあふせはなゝわだに。ワケ思ひとほした女氣は。ワケ風にみだれぬ玉簾。ワケすだれ貝とのへだてはうしと。くね

る目もとのしほ貝は。ワケなでしこ貝のしどけなく。物思ふとは白玉か。シテ何ぞと露のあだ言葉。つい口玉にかけられて。ツレ手枕ふれし朝寝髪。六斗一律上ル三絃一上ル三下リ たのしき中にふるさとを。かつしのばれて立ち歸る。乙女があたへし玉くしげ。明けてのどけきさらぎの。花のむしろにまとゐして。壽くらべ千代くらべ。山にくらべて此君の。高きよはひを祝しけり。

まがきの菊

琴曙調子 三絃二上リ　四世山木作

シテ庭のまがきに植ゑおける。ツレ菊の花こそ咲きにけれ。いとめづらしの色香よな。春のあしたの櫻花。秋のゆふべのもみぢ葉を。よそになしてはをかしさも。あはれもこれにとぢむらむ。まことや雲井の御庭には。天津星かとあやまたるゝも。之れ此花のさちならむ。シテされば めでたき菊の名の。ワケあまたはあれど八千種の。ワケ錦の中にまさり菊。ワケ露おきそはる百夜草。ワケその長月の長かれと。ワケ限なき世をちぎり草。ワケ乙女草てふ名もしるく。シテ里の乙女のさしかざし。ワケあゆ

きくすゐ

めば袖も匂ふなり。ワケ草のあるじの翁草。ワケうつろふ色のむらさきも。ワケなほめづらしき霜見草。ワケ花のとぢめときくからに。ツレくゝり花とやいふならむ。實にまさかりの秋の園。たかきいやしき中垣の。ワケへだてもみえず白菊の。ワケ花には露の光さへ。ワケ清らをそへて秋ごとの。ツレ友と千年をちぎらばや。御代をやち代とちぎらばや。

菊水

琴半岩戸調子琴四合三絃二上リ三絃一

山登萬和作

前弾シテその時正成。はだの守りをとり出し。ツレ合これは一とせ。都にたゝかひありし時。くだしたまひし綸旨なり。六、二律下ル雲井調子三絃一上ル三下リ これを汝にゆづるなり。斗二律下ル われともかくもなるならば。世は尊氏の世となりて。吉野の山の奥深く。シテ叡慮をなやましたまはむは。ワケ鏡にかけて見る如し。シテさはさりながら。正行よ。しばしの難をのがれむと。ワケ弓張月の影くらく。ツレ家名をけがすことなかれ。合三絃三上本調子 シテ父が子なればさすがにも。ツレ忠義の道はかぬて知る。シテうちもらされし者どもを。ワケはぐ

きくすゐ

くみ扶助しかくれがの。ワケ吉野の川の水清く。シテ流れたえせぬ菊水の。ツレ旗をふたゝびなびかせて。合敵を千里にしりぞけて。叡慮をやすめシテたてまつれ。ツレあえいりよをやすめたてまつれ。

阿古屋の松

琴雲井調子　三絃三下リ　琴三絃一合　山登萬和作

前彈シテ實にや雪降りて。ツレ年の暮れぬる時までも。つひに朽ちせぬ松が枝の。老木になれども年々に。また若緑たちそむ。幾春のめぐみなるらむ。秦の始皇のみしやくに。あづかるほどの木なりとて。シテ吳國にも本朝にも。ツレ今もつて此木を賞翫す。合シテ千歳までかぎれる松も今日よりは。君にひかれて萬代までのワケ春秋を。送り迎へてみかげ山。シテ高砂ワケ住の江シテからさきや。都の富士もあづまぞと。ワケ三保の松原くりはらや。あぬはの松の人ならば。都のつどにさそひなむ。シテあはれあこやの松かげの。名高さやツレたぐひなからむ。

臼の聲

琴半岩戸調子　三絃二上リ　琴四合　三代目　山登松齢作

うすのこゑ

前弾シテおぼろ夜の。ツレ影は霞の薄ものに。こぼれて匂ふ
梅が香の。日數にうつる春くれて。合六斗二律下ル(雲井調子)ワケ夏立
つけふの薄衣。シテうす紫のあふちかげ。ワケ涼しき風に
秋のたつ。合ツレ薄霧なびく初尾花。ワキほのかにうすく
暮れそめて。シテきゝうす高き山風に。ワケ月すむ秋の琴
のこゑ。ワケ夜寒の雁も音をそへて。ワキ外面の木々の薄
紅葉。三絃三上ル合シテいそぐ時雨の朝戸出に。庭のうす雪め
づらしな。ワケなげの情の筆のあと。ワキ墨うすからぬ玉
づさに。ツレ契は何かうすからむ。うすきへだての賤が
家に。合ツレ稲つく臼のつちのうた。シテ拍子も風に通ひ
きて。ツレうたふこゑおもしろや。

四季のすさび

琴雲井　三絃三下リ　中能島松聲作

シテ長閑なるツレ空も景しきもうらゝかに。霞みこめた
る四方山に。春を匂はす梅の花。合シテうち詠むればい
つのまに。ワケ谷の戸出てて鶯の。ワケ千代萬代をうたふ
らむ。ワケ人の心もこのごろは。あこがれいづる隅田川。
シテゆきかふ船の數々に。ツレ花の盛にきのふとすぎ。今

しきのすさび

日と暮していつしかに。青葉うすらぐ色まして。雲に一聲夕まぐれ。もの思はせていづかたへ。二上リ合ワケ鳴いてすぎゆく時鳥。シテ跡をしたうて山深く。ツレふりつむ雪とみゆるまで。皆白妙に卯の花の。ワケはらへど消えぬしづが家の。木蔭によるの淋しさは。シテ袖に覺えし月影を。わづかに見れば初尾花。ワケ千草の露にひかりそふ。ワケあはれゆかしき玉だれの。ツレ御簾の内なるつま琴の。合ツレいと面白き松虫の。聲にあはせて夜もすがら。合あかぬすさびも君が代に。末たのもしき常磐

木の。桂の枝にたまかけて。いとむつましき壽の。壽久しく色かへぬ。松の葉風に音高く。シテふるはあられか。降るは霰か木枯か。妻戸あくれば時しもあれ。ツレ木々の梢もみよしの。みまがふ花と雪の山。實に豐年のみつぎもの。合めでたかりける世のしるし。目出度かりけるしるしかな。

常磐

琴三絃 岩戸調子 上リ

四世山木作

シテあはれ身は。いづこをさして落人の。かげをかくさ

ときは

むやうもなく。見渡せば。野邊も山邊もはるばると。だ白妙に降りつむ雪に。飛びかふ夕がらす。今宵の宿はかなたなる。伏見の里かちちらと。灰に見ゆる燈火の。かげもかすかに行きなやむ。思へばむかし翠帳紅閨に夢むすぶ。シテ雲井調子三下リ鴛鴦のふすまに蘭麝の薫。寒さを知らであかしゝが。俄に起る都のさわぎ。ワケかの待賢門の朝あらし。吹き靡かせし白旗も。御運の末かちりぢりに。シテ君の行方もしらまゆみ。やたけ心をいかにせむ。ワケ二人の稚子はかちはだし。雪にこごえて泣音をしのび。ひとりは己がふところに。ワケ乳房をふくめど朝夕の。ワケうゐにつかれて露さへかれぬ。かくて空しくなるならば。ワケ仇をうつべき時もなく。ワケ我子をいかにはぐくまむ。たとへ此身はとらはれて。女子の道にそむくとも。ツレ心は雪にうづもれぬ。峯の松風谷間の梅が香。やがてぞ春に逢ひぬべき。時なからめやなよたけの。みさをのふしをうしなはて。終にはかへす旗風に。雪吹きはらふ大空の。朝日の影も常磐なる。松の緑の色そへて。その名は代々に傳へなむ。

小督の曲

琴片岩戸調子　三絃二上リ　琴四合　三絃一

前弾シテ　をじかなくッレこの山里と詠じけむ。さがのあたりの秋のころ。千ぐさの花もさまざまに。五、一律上ル六、二律下ル雲井調子三絃一上ル三下リ　虫のうらみもふかき夜の。月に松虫。まぬくは尾花。はぎには露のたま虫や。そよぐをぎ虫。くつわ虫。合シテ鳴く音につれて仲國が。れうの御馬たまはりて。ッレとのゐすがたのふぢばかま。たづぬる人のおもかげに。たつ薄霧の女郎花。それかあらぬかまぼろしの。よもぎがしまねたづねわび。こまひきとむるさゝのくま。合　やすらふかげの松風に。かよふつまおとつまこひの。ねによる鹿にあらねども。昔おぼゆる笛竹や。ワケあはすしらべのまがひなき。聲をしるべにしたひよる。ッレさが野のおくのかたをり戸。樂　さうふれんの唱歌は。ひよくの翅の雲井をこひ。盤渉調のしらべは。松の連理のえだにかよふ。シテ　小督のつぼね。世をしのぶ。すみかもッレあすは大原に。かへんすがたのなごりとて。シテよはに手ならすつまごとの。ワキいはこすおもひせ

きかねて。シテなみだにそてをかしはばや。人目もいかがあやめがた。ツレいとのいろねをしるべにて。さし入る月のワキ雲井より。シテ御つかひにまゐりしと。ツレかしこき君がみことのり。野べのをちかたわけきつる。つゆの玉づさしよする。シテつまどのはしのえんのつな。ツレ又ひき結ぶ御かへりごと。そへてたまはるいつつぎぬ。きぬぎぬおくるほどもなく。むかひのくるまたてまつり。合むかしにかへるもゝしきや。むかしにかへるもゝしきや。千代をちぎりの松のことのは。

熊野

琴半岩戸調子三絃二上リ　琴四合三絃一

前弾シテ清水寺のかねのこゑ。ツレ祇園精舎をあらはし。諸行無常のこゑやらむ。ぢしゆごんげんの花の色。娑羅雙樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ。げにためしあるよそほひ。シテほとけも斗二律下ル雲井調子三絃一上ル三下リもとはすてしよの。六、二律下ルツレなかばは雲にうへ見えぬ。わしのを山の名を殘す。寺はかつらの橋ばしら。シテ立ち出でて峰の雲。ツレ花やあらぬ。初櫻のぎをん林。しも河原。南を

はるかにながむれば。大悲應護のうす霞。ゆやごんげんのうつります。御名もおなじいまぐまの。シテいなりの山のうすもみぢの。ワキあをかりしはの秋。又花の春は清水の。ツレたゞたのめ。たのもしき春も。千々の花ざかり。合山の名の。おとはあらしの花のゆき。ふかきなさけを人やしる。シテわらは御酌に參り候べし。ワキいかにゆや。ひとさしまひさらへ。シテふかきなさけを人やしる。ツレなうなう。にはかに村雨のして。花をちらし候はいかに。ワキげに只今の村雨に。花のちり候よ。シテあらこゝろなのむらさめやな。春雨のツレふるはなみだか。降るはなみだか。櫻花。ちるををしまぬ人やある。シテよしありげなることばのたね。ワケとりあげみればいかにせむ。みやこの春もをしけれど。シテなれしあづまの花やちるらむ。八、一律上ルワケげにだうりなり。あはれなり。斗一律上ルはやはやいとまとらするぞ。あづまに下り候へ。シテ何御いとまと候や。ワケ中々のこと。とくとく下り給ふべし。斗一律下ルシテあらうれしや。たふとやな。ツレこれ觀音の御利しやうなり。之迄なりや。うれしやな。八、一

律下ルこれまでなりや。うれしやな。かくてみやこにおともせば。シテ又もや御意のかはるべき。たゞこのまゝにおいとまと。ゆふつげのとりがなく。ツレ吾妻路さして行くみちの。やがてやすらふあふさかの。せきの戸ざしも心して。あけ行くあとの山見えて。花を見すつる雁がねの。シテそれはこし路。ワケわれはまた。ツレあづまにかへるなごりかな。あづまにかへるなごりかな。

清華園

琴　半雲井
三絃　本調子

四世山木作

シテ夏すぎて。ツレあきもなかばとなるまゝに。いまや今戸のきしをうつ。浪の音さへすゞしくて。まつちのやまの松かぜも。千とせをいはふこゑすなり。シテ七草の花見むとてや。老もワケ若もワケをとめ子も。ワケまだ染めあへぬ紅葉ばの。ワケ錦のそでやあやのきぬ。ワケよそひてわたるまくらばし。ワケこゝやワケかしことワケみめぐりの。やしろをめぐりたづさへし。ひさごの酒をくみかはし。ツレたはぶれゆくもおもしろや。ワケ秋葉のもりのあきもせて。ワケ君を八千代とうたひつゝ。ワケむかふ

つゝみをゆきかへり。あそぶさまこそをかしけれ。ッレいざ言問はむみやこ鳥。わがおもふ人のそれならて。きかまほしきは月の出る。ワケかたはいづこぞ白髭の。ワケしらばをしへよ舟うけて。ッレなかすのあしべ棹さゝむ。はるかにあふぐにし山に。シテかゝるむら雲はれわたり。ワケ目ざましきまて富士のねの。シテ見ゆるぞまことこゝちよき。ワケかへりみすればつくばねの。ワケかのもこのものふかみどり。ッレそらにそびえてあらはれぬ。八、三ト同音ニ上ル いほさきあたりたつ雲は。かはらやくらむしわざとは。シテおもへどもしほたくあまの。けぶりと見えてけしきよし。かゝるながめをわがものに。清華の園とよびなして。シテつきよをよそにすみだ川。ッレかつしかを田になく鶴と。こゑよびかはし千代やへなましし。千代やへなましし。

松上鶴

琴 雲井調子琴 三絃 三下り三絃 一合　　山登萬和作

前弾シテ千早ふるッレ神の御代より。久かたの天地のむだ動きなく。しづまりたてる大内山。合シテあま雲もいゆ

しようじやうのつる

きはゞかる尾上の松の。ワケ相生のかげいやたかみ。シテかはすさえだにうらうらと。かゞやきのぼる朝日かげ。ワケ國の御いつも年のはごとに。しみさかえつゝ。東の峯に生ひ立ちて。シテちとせこもれる若松が枝に。ワケ末ながきなき春をちぎりて。鶴こそやどれ。ツレつるぞやどれる。合半ニテ斗二律上ルシテ巾三律上ル御代萬歳と祝ふなる。合ツキ大内山の松風に。ツレやがてもあすぞたぐふべき。すごもる雛の千代のもろごゑ。

忍ぶ草

琴三絃二岩戸調子琴上リ三絃一四合　四世山木作

いつとても。秋としいへば。物ごとにあはれうちそひ。老が身は。わきて淋しも。庭の面の。荻の葉風の音のみか。まがきの虫のなく聲も。シテ夜寒おぼえて。ことさらに。さびしかりけり。其のころはワケ枕にひゞき。その音は身にしみわたり。久方のワケ空を仰けば。くもりなく月のかゞみに。こしかたのワケむかしの御代もこゝろからうつるが如く。うれしくも。ワケかつかなしくもおもはれて。袖こそぬるれ。いづかたの。民のかまども朝

げたくけむり立ちそひ。よの中はシテゆたけく見えて。我君のッレ戸ざさぬ御代と仰ぎつる。シテ其のうれしさに引きかへて。秋はさびしも。吹風に。ワケ櫻の古葉さそはれて。ちりみだれつゝ日にそひて。霜置き初むる木々の葉の。もみづる見ても草の葉の。かれ行く見ても おいはまづ。ワケ涙こぼれつとにかくに。おもふ友どち うちつどひ。ッレことばの花をめづる外なし。

十津川の曲

琴櫻調　三絃二上り　琴四合　三絃一合　佐藤左久作

前彈シテいぬる元弘のその昔。ッレ逆臣はびこり世を亂し。恐れ多くも主上には。シテ九重の都を出でさせ給ひ。ッレ天が下にはかくれ家と。たのむかげもる松の露。羅綾の御袖にかゝるらむ。世のいぶせさを大塔の。みこの君にはやゝしばし。南都にしのびておはせしが。笠置の城は陷りて。主上囚はれ給ひぬと。きこしめされてせんなくも。熊野の方へと落ち給ふ。合由良港を見渡せば。澳漕ぐ舟の梶をたえ。浦の濱ゆふ幾重とも。しらぬ浪路に鳴く千鳥。ワケ紀路の遠山渺々と。ワケ藤代の松

に懸れる磯の浪。ワケ和歌吹上を外に見て。ワケ月に螢け
る玉津島。ワケ光も今はさらぬだに。シテ長汀曲浦の旅の
路。心を碎く習なるに。ワケ雨を含める孤村の樹。ワケ夕を
送る遠寺の鐘。ツレ哀を催す時しもあれ。切目の王子に
入り給ふ。合シテ實にや龍樓鳳闕の。内に生長たまひし
を。ワケ御いたはしやな。ワケ風の音虫の聲にも御心を。ワケ
いためたまひつ烏羽玉の。夜は叢の露を敷き。ツレ三十
餘里の途の程。絶えて人里もあらざれば。高峯の雲に
枕を欹て。苔の筵に夜を明かし。岩漏る清水に渴を忍

び て。世のうき數を盡しつくして。やがて十津川へぞ
着き給ふ。

伏見

琴三絃平調子　琴三絃調子　三合

中能島松聲作

シテ王政ツレ復古の往昔を。思へば過ぎし慶應の。三年の
冬の十二月。九日の日を始めにて。都の空にたちかへ
る。春の光もぬば玉の。世はかりごもと亂れつゝ。あや
めもわかぬすみぞめの。鞍馬に響く鬨の聲。よろひの
袖にかゞやくや。合ワケ星の位も三台の。影うすれゆく

さしぐしの。合ワケ曉暗き鳥羽伏見。ワケ大内山の山かぜに。ワケ錦の御旗ひるがへし。ワケ大將軍のいでましに。勇氣いやますすらを。ッレいくさよばひもいかづちと。轟きわたる修羅の道。斬りつきられつあびきうくわん。血しほにそむる紅葉園。赤き心をとり〳〵に。ワケ倒れかさなるしかばねは。ワケ敵かワケみかたか彼は誰時。ワケ蹈みしだきゆく戰場の。ならひ常なき露の身と。ワケかざす劍のつかの間も。君を忘れぬ武士の。道のはてこそあはれなれ。ッレ天地も動く震動に。炎さかまく合淀の城。合おほへる雲のたちまちに。合煙の末のかげろふの。消えて治まる君が代の。長閑けき春にうちまとひ。昔語と過ぎし世を。合語りつゝくむ盃に。老いたるかげのかず見ゆる。此うたげこそ樂しけれ。

足柄山

琴三絃雲井下リ　琴三絃一合

佐藤左久作

頃は寛治の春かとよ。堀河の院世をしろしめすッレめぐみあまねきみひかりの。くまなき御代にしこ草の。あだなすえみじを討てよとの。世にもかしこきみ

ことのり。忠義にきたふ義家が。やたけ心のつるぎたち。腰にとりはき深雪ふる。みちのく山に立てこもる。合ワケ同じ流の源や。立ち別れても末遂に。ワケ御國を守る義光が。都の空のあけくれに。ワケ君の寵榮淺からて。下向を許し玉はねば。ワケ彌生の花の色も香も。ワケめづるよしなきうたかたの。あはれはかなき世をかこつ。シテいでや後日のつみとがは。ツレよしあらば。あれそのかみの。難義を餘所に見らるべき。忍びいてむと九重の。大内山を後にして。あしげの駒に鞭をあげ。みちの

くさしていそぎゆく。合シテ雲に聳ゆる足柄や。ツレ山又山のつゝら折。道もさだかに朧夜の。月影やどす白樫の。枝を交ふる木の間より。花の香おくる小夜風に。遠く聞ゆる駒の音は。大内よりの御使か。それかあらぬか呼子鳥。呼べば答ふる山彦の。ワケ音にも心おく露の。木の下影に駒とめて。しばしやすらふ義光の。ワケ後逐ひすがる時秋は。いきせきあへぬ道芝の。ツレ露にしほるゝ若草の。合ワケみどり色ます下がさね。ワケゆかりなつかし紫の。こきさしぬきの色にでゝ。ツレいはねど夫

と山吹の。露重げにも見えにける。シテみちのくえぞのはてまでも。死生を共にと覺悟して。御跡したひまゐりしなり。ワケまげて御伴ゆるさせ給へ。ワケ義光しばし思案して。まこと切なる御心。ワケいかでか淺く思ふべき。さはさりながら。吾れこのたびの下向は。生きて歸るの心なし。ワケ御身は世にありがたき玉の緒を。つなぎとゞめて豐原の。ワケ流いみじき笙の手を。シテ萬代までも傳ふべし。いざや秘曲を授け參らせむ。ワケとくとく都に立ち歸り。君の御爲道のため。時の風をもあげ給へ。ワケ心得たりやと說きさとす。なさけの雨の露衣。ツレほすよしもなき木の間より。もる月影の朧夜に。シテ吹きすさびぬる笙の音は。實に雲井まで通ひつゝ。樂ツレ花を見捨てゝゆく雁も。なごり惜むか。音をとゞめ。天つ乙女も舞の手を。打ち忘れなむばかりなり。ワケ時秋感涙せきあへず。ワケ夜もすがら口授をうけ。ツレ空もやうやう鳥がなく。あかつきがたになりぬれば。いざとて暇たまひける。シテあゝかゝる高恩の師をすてゝ。などか都に歸らるべき。ワケさは思へどもふじの根の。

山より高き御教を。いかでかあだにととりなほす。ッレ心の太刀や梓弓。入る月影の名殘をば。四つの袂にとどめても。立ちぞ煩ふ旅衣。むつと都にしぼるらむ。

四季の富草

琴半雲井琴　三絃三下リ三絃一　中能島松聲作

シテ久方のツレ天津光の長閑にも。霞たなびき浦々の。梅が香かをる春の野に。あこがれ出でて思ふどち。袖ふりあひてそことなく。もゆるいとゆふ糸柳。あかねすてたる手づさみに。若菜つみつゝひねもすに。合シテ瓢の酒もかたむけて。こゝに子の日の姫小松。まちわびくも。花にくらして月にふけ。三絃ハ本調子合ノ手ツレ夏はことさら顔に鶯の。ワケもゝさへづりの聲聞けば。齡を野邊の嬉おばしまの。ワケをすまき見ればをりよくも。五月雨もるゝ雲間より。一聲もらすほとゝぎす。合ワケすぎゆく方に夕月の。影めづらしくさし出てて。ツレさと吹く風に立花の。薫ゆかしき妻戸口。シテたゝく水鶏にはかられて。はしゐしをれば。やり水に。きらめく星の光かと。まがふばかりに螢とび。合シテまた秋の野はさまざま

に。尾花葛花女郎花。ワケなまめくさまのなつかしく。ワケ
ここに一夜を雁金の。聲もあはれにひゞきくる。ツレ里
のきぬたの音たかく。合八、一律上ケル、二律下ゲ三絃二上リ ツレ夢もくだけてさ
やかなる。ワケ月かげふけてものさむき。ワケしはすのこ
ろは白雪の。合ワケつもるをほしのさま見れば。誰が殿
よりの御使ぞ。ツレかほのいろさへくれなゐの。きぬく
ばりかもにぎはしき。シテ都の市のいち人も。ツレなりは
ひよしとあふぎつゝ。富み榮えゆく御代ぞかしこき。

雨夜の月

琴半岩戸調子 三絃二上リ　琴四合 三絃一合

中能島松聲作

前彈シテ落花の雪に蹈みまよふ。かたのゝ春の櫻狩。紅葉
の錦着て歸る。嵐の山の秋の暮。ツレ合實にいたはしや
俊基卿。身はとらはれの籠の鳥。のがれがたなき恩愛
の。我古郷の妻子をば。ゆくへもしらずおもひおき。は
るけき旅に出て玉ふ。心のうちぞ哀れなる。合うきを
ばとめぬ逢坂の。關の清水にうつらふ影の。末は山路
を打出の濱。瀨多の長橋うち渡り。行きかふ人に近江
路や。夜をうぬの野になく田鶴も。シテ子を思ふかとか

なしまれ。ツレ時雨もいたく森山の。ワケ葉末の露に袖ぬれて。風に露ちるしの原や。合ワケ忍びかねつゝ越え行けば。鏡の山はありとても。涙に曇りて見えわかず。シテ物を思へば夜の間にも。ツレ老蘇の森の木がくれに。都のそらやへだつらむ。合斗二律下ル（雲井調子）三絃三下リ あらはづかしや我姿。浮世の夢はかり衣の。不破の關屋はあれはてゝ。なほ漏るものは秋の雨。いつか此身の尾張なる。熱田の社ふしをがみ。合シテしほひに今や鳴海潟。ワケかたむく月に道見えて。ワケ末はいづこと遠江。ワケ濱名の橋の夕

汐に。シテ引人もなき捨小舟。合ワケしづみはてぬる身にしあれば。ワケ誰かあはれと夕ぐれの。シテ入相なれば今はとて。ツレ池田の宿に着き玉ふ。合三絃本調子 元暦元年のころかとよ。重衡の中將が。東夷の爲にとらはれて。シテこに宿を求めしに。ワケ東路の羽丹生の小屋のいぶせきに。古郷いかに戀しかるらむと。ワケ長者のむすめがよみたりし。そのいにしへのあはれまで。ツレ思ひ殘さぬ涙なり。シテ旅館のともしびかすかにして。雞鳴曉を催せば。匹馬風にいなゝきて。ツレ天龍川をうち渡り。小

夜の中山過ぎ行けば。いとゞ哀を菊川の。なみだの流汲みかねて。やがてぞ越ゆる大井川。合シテ島田藤枝を後になし。岡部の眞葛うらがれて。物哀なる宇都山。合ワケむかし在原の業平が。東の方に下るとて。よみし心も清見潟。合ワケ都に歸る夢をさへ。通さぬ浪の關守に。いとど涙を催され。合ワケ向ふはいづこ三保が崎。興津蒲原うち越えて。富士の高根に立つ煙。合シテ上なき思に。くらべつゝ。ワケ明る霞に松見えて。うきしまが原を過ぎ行けば。ツレおりたつ田子の自からも。浮世をめぐ

る車がへし。合竹の下道ゆきなやむ。足柄山をこゆるぎの。いそぐとしもはなけれども。日數つもればそれの日に。鎌倉にこそ着きにけれ。

須磨の嵐

琴三絃三下リ　雲井調子　琴三絃一合　山登萬和作

前彈シテそもそも熊谷直實は。征夷將軍源の。ツレ頼朝公の臣下にて。關東一の旗がしら。智勇兼備の大將と。世にもしられし勇士なり。合されば元暦元年の。源平須磨のたゝかひに。功名ありし物語。きくもなかなかあは

れなり。合其時平家の武者一騎。沖なる船におくれじと。駒を浪間にかけ入れて。一町ばかりすゝみしを。ツレ扇をあげてよびもどし。互にしのぎをけづりしが。合ワケ見れば二八の御顔に。シテ花をよそほふ薄化粧。ワケかぬくろぐろとつけたまふ。ワケかゝるやさしきいてだちに。シテ君はいかなる御方ぞ。名のりたまへとありければ。三絃本調子ワケしたより御聲さわやかに。我こそ參議經盛の。三男無官の敦盛ぞ。はやはや首を打たれよと。西にむかひて手を合す。合シテ流石にたけき熊谷も。我子の事まで思ひやり。落つる涙はとゞまらず。よろひの袖をしぼりつゝ。是非なく太刀をふりあげて。ゆるさせたまへとばかりにて。あへなくしるしをあげにけり。ワケむざんや花の蕚さへ。ツレ須磨の嵐にちりにけり。合これを菩提のたねとして。なきあと長くとむらはむ。心おきなく往生を。とげたまはれといひのこし。シテ青葉の笛をとりそへて。ワケ八島の陣へと送りしは。ツレげに情あるものゝふの。シテ心のツレうちぞあはれなる。

祝ひ歌

琴牛雲井　三絃本調子　琴三絃一合

見渡せば。四方の梢も若葉して。みどり色こき皐月そら。時鳥のこゑさえて。賤が軒端の卯の花も。ゆきかと見えて涼しさに。池のはちすの風香る。浄瑠璃こゝにゆかしきその主は。いかなる人がみやびにて。今はうき世をはなれいほ。庭に千草の花園は。すがたやさしき姫百合の。露に色香もふかみぐさ。なれて小蝶のたはむれは。かはゆらしいぢやないかいな。歌つきぬながめの其なかに。夕顔棚の下涼。せなはてゝらに目はふたの。心ゆたかに富ぐさの。浄瑠璃榮を祝ふたつくりの。くみかはしたる睦じさ。おなじ世界にありながら。深き思は道の奥の。歌忍ぶ捩摺誰故に。亂れし髪もやるせなく。思を文にかきつばた。浄瑠璃ゆかりの色の小紫。心青いのもろかづら。二葉の松の幾千代と。歌末つむ花の末かけて。かはらぬ中と岩つゝじ。浄瑠璃ほのめく色にあらはれて。あだに浮名も橘や。歌袖の香ふかくなれそめて。猶色ますと岩藤の。浄瑠璃しがらみかけし

ぎわう

戀のふち。ちぎる言葉のはながつみ。えにしを結ぶ奈良坂や。歌このてがしはの二た流。まもらせたまふ神垣や。淨瑠璃久生女來は女體と源氏。辨才天とあまざかる。淨瑠璃ひなも都もおしなべて。歌天が下しる御惠。合歌ことに和合の道ひろく。淨瑠璃民をあはれみ。威德をへうし。歌糸のしらべの祝歌。目出度かなで奉る。淨瑠璃目出度かなでたてまつる。

祇王

琴雲井調子　琴三絃三下り　三絃一合

山登萬和作

前彈シテもえいづるも。ツレ枯るゝもおなじさがの野の。千草の花のいろ〳〵に。錦おりなす花模樣。翠帳紅閨の寵愛に。風をいとひし露の身も。あだし嵐にふきはらはれて。今は野末にはらからが。シテ葛のうら葉の恨をも。ツレたがひに思ひきりぎりす。ツレ草の葉袖もかきあはぬ。麻の衣にぬぎかへて。合シテ斗二律上ル佛ももとは凡夫なり。ツレわれもむかしはほとけなり。シテいづれも成佛とぐる身と。さとるこゝろのあかのゐの。ツレきよき流をくみてこそ人もしれ。シテ佛御前はおのが名の。ほと

けてふ名も今さらに。ワケそぞろに思ひしられつゝ。シテ世のはかなさを今までも。知らですごしゝおろかさを。ツレ斗二律下ル思ひかへせばいとどなほ。あらはづかしのわがこゝろ。あらはづかしのわが姿。シテさとれば榮華も一夜の夢。合三絃三下リ(本調子)シテいづれか秋をのがれむと。人めのせきを忍び出でゝ。見ればうれしやをちこちに。ワケわれを招ぐかしをりして。尾花かるかやつがねがみ。ツレ拂へば今は法の道。あふぐ高根も鷲の山。眞如の月もすみわたる。シテ千すぢのみちをひとすぢに。ツレ露ふみわけてたづね行く。こゝろのうちこそあはれなれ。

田植の幸

琴平調子ニテ四、二律上ル三絃二上リ 三代目 山登松齡作

前彈シテ里の卯の花やゝ咲きそめて。ツレ山ほとゝぎすの忍び音も。閨の衣のうらなつかしく。短き夜半のとこよもの。花橘のうつり香に。きぬ〴〵慕ふ後の朝。人目をつゝむ妹が戸も。シテまだ若竹の世心づかぬ。乙女がともゝ打ちつれて。ワケ小田におりたち足なみも。ツレ揃

ひの笠にひとへ衣。くれなゐ匂ふ玉だすき。八、一律ドル九、二律上ル(半雲井)

三絃二下ル(本調子)合シテ掛けまくも。いともかしこき天皇の。ワキ御代明らけく治まれる。合シテ九年の五月陸奥へ。行幸ましますすがら。ワケ親く見そなはせ給ひしは。ワケ百姓をいつくしみ。ワキいたはりましますみ心にて。ツレいと有難きためしにこそ。合ツレそも〳〵我大御國は。もとより百千足國とて。よろづの物のたるが中にも。すぐれて稲の生ひたつより。みづ穂の國ともたゝへたり。穂とは息の根といふ事。息ある内が命にて。いのちを保

つ根本なり。かく大切の初稲を。シテ神に奉らせたまふを新嘗會とぞまをすなる。ツレされば人〻もつゝしみて。ゆだねをおろし苗代に。ワキ五十串を立てゝ七五三はへて。ツレ水口祭もおごそかにせよ。シテ三千五百萬のたみぐさが。ツレかゝるたふとき瑞米を。あくまで食ひ腹つゞみ。合うちつ御國の早苗草。年ある秋の千五百秋。シテ榮え行くこそめでたけれ。ツレ榮え行くこそめでたけれ。

御旗の動功

琴半雲井　三絃三下リ　琴一　三絃一　合四世山木作

シテ元弘のむかしとかや。兵部卿の宮と申し奉る皇子。北條の高時を。うたんとおぼしたまひけるに。みいくさ利あらず。村上のよしてる。赤松なにがしをしたがへて。十津川さして落ちさせたまふ。折から又もおそひ奉るとの聞えあれば。吉野とおぼす道すがら。いもせの荘司といふもの。みさきをさへぎりけり。ワケ宮おどろかせたまひて。なんぞとのたまへば。シテ熊野の別當。おふけなくも宮を鎌倉に送りまゐらせむの心なり。ワケ我ひとりよそに見奉りなば。後のおそれあり。ツレかしこけれども。近くにさふらへる人。さなくば錦のみはたをだにとこひまつれば。すべなく御旗を渡したまひけり。折しも村上よしてるが。何條さることあるべきと。たゞちにみはたをとりかへしつ。かくて宮はやうやう落ちさせて。吉野に籠りたまへども。シテ大軍いみじうかこめば。城のつはものたちまちに。ツレ殘るはわづかになりにけり。ワケ宮もみづからつるぎをとり。シテみこゝろたけくおはせども。御身のほどぞお

ぼつかなき。ワケ折しもよしてる。かしこにたゝかひ。シテ身には千節の箭をおひたれど。變る色なく御まへに。かしこまりて奏するやう。ワケとくとく此所をのがれたまへ。敵もししらばいかにせむ。おのれひとりとゞまらむ。ワケかしこかれども着させたる。シテ錦のおほんひたゝれに。おほんよろひを給はらむ。ワケたふとき御名をもかさせたまへと。こゝろさだめてこひまつれば。ワケ宮は御なみだをはらひながらに給はせけり。ワケよしてる。うれしと伏し拜み。ツレ城のやぐらにはせのぼり。はるかに御影を見送りて。よせてのかたを打ち見つゝ。シテ我こそは今上三の皇子なれ。汝らいかで天のとがめをまぬがれむ。シテいでや手並を見せむずぞ。かゞみにせよとなのれるは。實にいさぎよく見えにけり。平調子今を去る五百年あまり。其みよしのゝ山櫻花。ワケあらしのあともかぐはしき。シテよしてるがいさをしは。すゝみ行くよのをしへの庭。ワケうなゐらも。ツレみな口すさみ。かたりつぐこそめでたけれ。いひつぎゆくこそたふとけれ。

國の基

琴半岩戸調子三、一律上ゲ琴四合三代目山登松齢作
巾三律上ル、三絃二上リ三絃一

前彈シテ仰げやあふげ。天壤のッレあらむかぎりはさかえむと。天津御神ののたまひし。みことのまゝに高御座。動かぬもとゐたてそめし。シテ神武のみかどは智仁勇。ッレそなはりませる君にして。皇祖瓊々杵の尊より。日向の國の高千穂に。宮居さだめて。まつりごと。しきたまへれど恩澤に。まだうるほはぬ國おほし。六斗二律下ル巾三律下ル（半雲井調子）三絃一上ル（三下リ）合シテ邑長たがひにあらそひて。ワキ罪なき民のくるしむを。シテすくひたすけて天業を。おしひろめむとをゝしくも。ワケおぼしたゝして諸皇子と。大御軍をひきゐまし。ッレ西のはてよりはるばると。ひんがしさしていでたゝす。合ワケ御稜威の風に草も木も。なびきしたがひ。ワケ丹敷畔戸。ワケ兄猾はじめ。ワケ兄磯城らも。ワキ長髓彦もほろびけり。三絃本調子合シテ大和の國の橿原に。都をさだめ宮ばしら。ワキふとしきたてゝ御位に。のぼらせたまひもろ〳〵の。ワケつかさをさだめ天の下。ワケしづめたまへば大八洲。また波風のさわぎなし。シテ國

民よろこびまつろひて。肇國しらす天皇と。ッレあがめたふとみ天地の。わかれしごとくあきらかに。君臣の分さだまりぬ。八、一律上ル九、二律下ル(平調子)合三絃二上リ地球の中に國といふ。國はあれどもうら安の。國の名おひてとつくにの。人もうらやむたぐひなき。國をたてたる天皇の。大御勳功にくらべては。畝傍の山も高からず。埴安の池も深からす。三千餘萬の御國人。とほつおやより數々の。うけしめぐみをわすれざれ。うけしめぐみをわすれざれ。

三九年川

春の曲

琴半雲井琴一　三絃本調子三絃一合

四世山木作
町田作

シテ咲きつゞく花は浮世の燈と。ッレ分け行く道もしる人ぞ。知るやしらずや三九年川。ながれ渡りに柴舟の。春をむかへし松飾。艫櫂の音も平かに。シテ治まる御代に初日の出。水に影さすくれなゐの。色は岸邊の紅梅に。ワケさそはれてなく鶯の。聲にいつしか民草も。ッレうかれて共に君萬歳を。うたふ心こそたのしけれ。

夏の曲

琴半雲井琴三絃本調子琴三絃一合

野邊に五色の花さけば。山に綠の葉をならべ。ワケ天つ乙女の羽衣を。こしにうつすやうつせみの。ワケせわしきなくねサッサッと。松の葉風にまぎれくる。ワケ細谷川の夕景色。苔むす岩に白波の。ワケパッと立ちたる水けむり。ワケ見えつワケかくれつワケ影くらき。シテ草の根に住む螢の虫は。こいよ〳〵と飛びまよふ。ツレあらおもしろのありさまやな。

秋の曲

琴平調子琴三絃二上リ琴一合三絃一合

ワケさやけき秋の月影は。尾花が上にうつろひて。露の玉だれかゝる身の。ワケ思をのぶる夜もすがら。草に宿かる虫の聲。ワケ神をいさめの鈴虫に。暮をまつとや松虫の。なくねもいとゞきりぎりす。あはれ霜夜のさむしさに。ワケちやう〳〵はたと碪打つ。賤がうみそのよるの業。小川にさらすきぬ〴〵は。ワケとけつワケむすびつワケ結びつワケとけつ。シテ水のまにまにまかせけり。

冬の曲

琴曙調子琴三絃三下リ琴三合三絃一合

ツレあしたゆふべも過ぎ行きて。はや初冬の神無月。つ

みくねがは

くやゐの子のもち花も。小春の名にや匂ふらむ。その
うつり香もさめやらぬ。花のふゞきはどこへやら。峯
の木枯さら〳〵と。のきばに落つる雪の空。雪や霰や
こんこんと。口に手をあてわらんべの。また來る春を
待ちかねて。興ありげなるたはむれは。實にありがた
き御代なれや〳〵。四海波風をさまりて。君のよはひ
は千代八千代。萬々歳の後までも。榮久しき三九年川。
つきせぬ名こそめでたけれ。

花の雲

琴三絃半岩戸調子、巾三律上ル　琴三絃四合上リ　山勢作

前弾シテ立ちそむるツレ霞の衣はるしるき。ゆるしの色の
ゆかりある。シテ名さへなつかしあやめがた。ワケ其琴の
緒のとをあまり。ツレ三とせの昔しのばるゝ。六斗二律下ル巾三律下ル
（雲井調子）三絃三下リ合シテ おもひ出づればきさらぎや。ワケ望の夜ま
たでおぼろげに。ワケ入りにし月の顔ばせを。ワケおぼつ
かなくもいまもなほ。シテながめやらるゝ大空は。ワケ戀
しき人のかたみかは。ワケ殘んの雪の故郷の。シテ越路に
歸る雁がねも。ツレ花の雲間にかげみえて。樂シテ處女子

が。をとめさびすも。から玉を袂にまきて。處女さびすも。ッレ袖打ちかへし。うちかへし。シテ舞ひ遊びしはかしこくも。ワケおとに聞えし瀧の宮。シテそれはよしの〻倭國琴。ッレこれは筑紫のことふりし。合千代のかみつよ豐國や。とよさかのぼる朝日子の。彦の山邊にひきそめて。幾代さかえむ松が枝に。シテかよふ常磐の家の風。ッレつきぬしらべぞたのしかりける。

旅順閉塞

琴半雲井琴一
三絃本調子三絃一合

今井慶松作

前弾ワケ頃しも春の如月や。ッレ廿四日の小夜ふけて。合ワケ天佑あつき天津丸。ワケ仁義に深き仁川丸。ワケ大和の武士が君のため。國に報ゆる報國丸。ワケ何にたとへむ胆力は。ワケ武州武揚の武き船。ワケ舳艫ふくみて黄海の。ワケ如法闇夜の海原や。ッレ命捨つるにおくれじと。勇みて目指す旅順口。合ワケ常に油斷の敵ながら。あなや夜襲と覺りけむ。ワケ老鐵山や饅頭山。ワケつらなる山の臺場より。ワケ港の口に座礁せる。ワケレトウヰザンの船より。ワケ探海燈を振向けて。ッレ盛んに大砲うち出す。いと

すさまじの有さまや。いと凄じのありさまや。合本手ワケ替手
勇猛決死の大和武士。ワケ身はなきものと思へばや。ワケ
千電ひらめくものとせず。百雷轟く事とせず。ワケ火花
とび交ふ壯觀に。ツレみな快哉と叫びつゝ。五艘の船は
前後して。港をさして入らむとす。合ツレ周章し敵は陸
兵を。載せて來しとやおもひけむ。大砲小銃ピストル
と。闇を目標に亂發す。平調子二上リワケ成効期して生還は。期せ
ぬ決死の勇士たち。ワケ重き任務を載する船。沈めて港
口塞ぎつゝ。ワケ殊に港の奥までと。深くのり入る報國
丸。ワケ烈しき砲火の眞中に。ワケ從容任務をなし果てゝ。
ツレ萬歳萬歳唱へつゝ。爆發せむとするやいな。恰もよ
しや敵彈の。船にあたりて火を發す。渤海灣の小夜嵐。
折しもあれや吹き起り。靡く煙立ち籠めて。短艇の影
は陰れけり。合琴あけぼの調子三絃一ヲ上ル ワケ忠義の道に身を捧げ。ワケ國
に殉ふる大和武士。ワケ後の世までに傳はらむ。ワケ功績
のほどもたふとしや。ツレいさをのほどもたふとしや。

竹生島

琴 雲井 三絃 三下リ　琴 三絃 一合

千代田檢校作

前彈シテ頃は彌生の中端なれば。ツレ浪もうららに海のおも。霞みわたれる朝ぼらけ。靜に通ふ船の道。實に面白き時とかや。合シテ如何にあれなる船に。便船申さうなう。ワキおうめされ候へ。シテ嬉しや。さては。三絃本調子迎ひの船。法の力とおぼえたり。ワキけふは殊更のどかにて。こころにかゝる風もなし。シテ山々の春なれや。花はさながら白雪の。ワキふるか殘るか時しらぬ。ワキ峯は都の富士なれや。シテ猶さえかへる春の日に。ワキ比良の根おろし吹くとても。シテ沖こぐ船はよもつきじ。ワキ旅のなら

ひの思はずも。ワケ雲井のよそに見し人も。ワケおなじ船になれ衣。ツレ浦をへだてゝ行く程に。竹生島にぞ着きにける。合シテ承り及びたるよりもいやまさりて有難し。ふしぎやな此島は。女人禁制と承りてありしが。あれなる女人は何とて參られ候ぞ。ワキそれは知らぬ人の申す事なり。忝なくも此島は。九生如來の御さいたんなれば。誠に女人こそ參るべけれ。合シテなうそれまでもなきものを。ツレ辨才天は女たいにて。其神德もあらたなる。天女と現じおはしませば。女人とて隔なし。

たゞ知らぬ人の言葉なり。合實にか程うたがひも。あら磯島の松陰を。便によするあま小舟。シテ我は人間にあらずとて。社壇の戸びらを押しひらき。御殿に入らせ給ひければ。ワキ翁も水中に入るかとみえしが。白波の立ち歸り。シテ我は此海のあるじぞと言ひ捨てて。ツレ又も波にいり給ふ。ふしぎや虛空に音樂聞え。花ふり下る春の夜の。樂ツレ月に輝く乙女の袂。かへすゞも面白や。シテ夜遊の舞樂もやゝ時過ぎて。ワキ月すみわたる海づらに。合ツレ浪風しきりに鳴動して。下界の龍神

顯はれ出て。合光も輝く金銀珠玉を。かのまれ人に捧ぐるけしき。有難かりける奇特かな。

賴光

琴平雲井調子 三絃一 合　　四世 山木 作

前彈シテ賴光いはほに腰をかけ。是よりすゑは道もなし。東西をだにわかたねば。何を印。なにをしるべに討つべきぞ。進退こゝにきはまつたり。ツレ假令五年が十年も。鬼神の面を見るまでは。賴光が屍は此山にさらさんず。かたがたいかにとのたまへば。五人の人びと詞

をそろへ。シテ御諚にや及ぶべき。生國はかはれども。冥途の道に二つはなし。ワケ保昌は上總の國海上の生れなり。ワケ定光は信濃の國薄氷の生れ。ワケ季武は遠江濱名の生れ。ワケ綱は武藏の箕田の者。ワケさて公時はッレ伊豆の國とは申せども。生所もしらず宿もなき。山姥が子なれば。丹波一國の山狩をしても。何程の事あらむや。打ッたてもつともと勇みすゝみし勢は。いかなる天魔厄神も。恐れつべうぞ見えたる。シテ見渡せば鳥も通はぬ岨傳ひ。ワケ老いたる山賤たゞひとり。ッレあじかに入れしさゝぐりの。小笹をわけて歩み來る。シテこゝろ得ずとはおもへども。賴光不敵の大將にて。いかに山賤。この國の千丈が嶽鬼が窟はいづくなるぞ。きかまほしとのたまへば。ワケおそろしき所のお尋かな。ッレ聞いて用心せむためなり。かまへてまよひたまふなよ。あれあれ南にあたつて木ふかくしげる高根あり。シテ白き雲かと見えたるは。鬼が城より流れ落つる瀧の水。血しほに見ゆる時しもあれ。その峯のあなたこそ鬼がいはやときくばかり。人倫たゆれば誰ありて。ワケ

見し人とては候はず。なう客僧と教へてこそは通りけれ。シテ賴光は力を得。八上ル斗上ルさあらば此峯越やとて。猪猿鳥の聲たえて。ワケのぼれば天に逆のぼるかと。眼くるめき。ワケくだれば。ないりにおち入るかともめざまし。半雲井シテ十萬里の波たつて。はくうのあとをのこし。二千歳の石橋と成りたり。ワケ人つかれ氣もたゆみ。高根の雲に枕をそばだて。岩もる水に咽を潤し。ワケ枯木そびえてよこたはり。苔なめらかにつゆしげき。かつらをたぐり足をつまだて。木の根にとりつきとり

つき心をくだき。きもおけず。ツレ耳にふるゝものとては。シテみねにこたふる山彦や。言問ひかはすものとてはは。ツレしるしと得たる松と杉。木陰にいざと人びとは。息をやすめて立ちたまふ。ワケ茅生ひしげる木陰を見れば。ワケわかやかなる上蔦の。血しほに染めたる小袖をもち。ワケほそ谷川にうちひたし。なみだとともに洗ふてい。ワケ九、二律下ル公時見つけて飛んでかゝれば。シテなうさらさら變化の者ならず。みやこがたより此ところの。酒呑童子にとらはれて。翌日をも知れぬ憂身の

中。ワケあとにのこりし妹も。此ごろ連れ來り。われ等ごとき數をもしらぬむすめ子を。ワケ童子が常のたのしみに。かいなをぬき。股をそぎ。酒と名づけて血をしぼり。ワケ銚子に入れてわれわれに。酌をさせての酒もり。けふは人の酌とれば。ワケあすはわが身もたれ人に。酌とられむとの物おもひ。ふびんや妹もゆふべの寐ざけに引きさかれ。ワケ今のいのちもおぼつかなく。血をそゝいで其衣を。ツレせめてきよめむこゝろざし。あはれみたまへ客僧と。袖にすがりて泣き居たる。シテ九ヲ四

ニ合シテ上ル斗曙

賴光もなみだぐみたまひ。おうなげきこそことわりなれ。われは勅をかうふりて。鬼神退治に向ふたり。かれが住家に案内あれ。惡鬼をほろぼし。かたがたをも。都へおくりかへすべし。とのたまへば。ワケありがたやかたじけなや。身のかたき。世のかたき。道びきいたし申すべし。ツレ鬼が城は近けれど。半雲井案内しらねば百日も。おなじ所をめぐるなり。シテ連れたちて眷屬どもにあやしめられては御大事。ツレわらはが姿を見えがくれにとさきへ立てば。目もはなさず。木の

間をわけて十町あまり。ゆくかとすればたちまちに。鬼が城へぞ着きたまふ。

石山源氏上

琴 雲井調子 三絃 三下リ 琴 三絃 一 合　千代田檢校作

シテ衣もおなじ苔の道。ころもゝおなじこけのみち。石山寺に參らむ。ワキ是は安居院の法印にて候。シテ我れ石山の觀世音を信じ。常にあゆみをはこび候。ワキけふもまたまゐらばやと思ひ候。ツレ時も名も花のみやこを立ち出でて。嵐につるゝ夕浪の。白川表過ぎ行けば。音

羽の瀧を外に見て。關のこなたの朝霞。合されども殘る有明の。影もあなたに鴉の海。實に面白きけしきかな。合さゞ波や。しが唐崎の一ツ松。鹽やかねども浦の浪。たつこそ水の煙なれ。たつこそ水のけむりなれ。三絃本調子シテかくて御堂に參りつゝ。補陀樂山も是かとよ。ワキ四方の詠もたへなるや。ワケ瑠璃やめなうの石山寺。ツレこがねいさごを地にしきて。木々はたからの花ざかり。シテはるかに月の影清く。光かゞやく玉の堂。ツレこゝ安樂の御國ぞと。ワキ聞くもたへなるふだん香。シテ染

りかさなるすみ色の。ワケ衣のさまこそたふとけれ。シテなうなう。あれなる御法の人に。まをすべきことの候。我は紫式部なるか。此山にこもり。あだ夢の根なし草なる言葉の末。ワキ源氏六十帖に書きつらね。ワケつたなき筆にまかせつゝ。名のかたみとはなりたれど。ワケかの源氏に供養をせざりしにより。ワケねがはくば供養をおんのべ。我あとをとひてたび給へや。ワキ安きあひだの御事。御ねがひにまかすべし。三絃三下リシテ聲みつや。法の山風ふけ過ぎて。ツレ光

やはらぐ春の夜の。眠をさますかねのこゑ。ワケ光る源氏のあととはむ。ワケひかる源氏のあととはむ。シテあらありがたや嬉しやな。何をか布施に參らせ候ふべき。ワキいや布施などゝは思ひもよらず。ワケありし都の御手ずさみ。昔にかへす舞の袖。かたみに舞うて見せ給へ。シテいかで仰をそむくべき。はづかしながら舞はむとて。ワケもとより其名も紫の。ワケ色珍らしき薄衣の。日も紅の扇をもち。よわよわと立ちあがり。ツレあはれ胡蝶の一と遊び。夢の内なるまひの袖。うつゝに返すよ

しもがな。

石山源氏下

琴三絃 半岩戸調子 琴三絃 二上リ 琴三絃 一四合 千代田檢校作

前彈シテ 抑桐壺の夕べの煙すみやかに。法性の空にいたり。ワキ箒木の夜のことの葉は。終に覺樹の花ちりぬ。ワケ空蟬のむなしきこの世をいとひては。ワケ夕顏の露の命を觀じ。ワケ若紫の雲をむかへ。ワケ末摘花のうてなに座せば。シテ紅葉の賀の落葉も。よしやたゞ。たまたま佛意にあひながら。ワキ榊葉のさして往生を願ふべし。

合シテ 花ちる里に住むとても。愛別離苦のことわり。まぬがれがたき道とかや。ワケたゞすべからくは。生死流浪の須磨の浦を出でて。シテ四智圓明の明石のうらに身を標。ツレいつまでもありなむ。たゞ蓬生の宿ながら。菩提の道をねがふべし。松風の吹くとても。合シテ業障の簿雲ははるゝことさらになし。秋の風きえずして。しま忍辱のワキ藤ばかま。上品蓮台に心をかけて。シテまことある七寶莊嚴のまき柱のもとにゆかむ。ワキ梅が枝の匂にうつる我心。藤のうら葉に置く露の。ワケその

たまかつらかけしばし。ワケ槿の光たのまれず。あしたには。六斗二律下ル（雲井調子）三絃一上ル（三下リ）ワケ旃檀のかげにやどり木。名も高きつかさ位を。あづまやのうちに込めてたのしみ。榮をワケ浮舟にたとふべしとかや。ワケこれも蜻蛉の身なるべし。ッレきやうげんきげふをふり捨てて。助け給へと諸共に。鐘うちならし回向も既に終りぬ。ワキよくよく物を案ずるに。紫式部と申せしは。シテ彼の石山の觀世音。かりに此世にあらはれて。かゝる源氏の物語。ッレ是も思へば夢の世と。シテ人にしらせむ御方便。實にありがたきちかひかな。ッレげにありがたきちかひかな。

長恨歌曲

琴三絃　雲井調子巾三律上ル　琴三絃　一一合　三下リ

前彈シテ今はッレ昔もろこしに。いろをおもんじたまひけるみかどおはしましし。やうかの娘かしこくも。君にめされてあけくれの。おんいつくしみあさからず。常にかたはらにはんべりぬ。シテ宮のうちのたをやめ。三千のてうあいも。ッレわが身ひとつの春の花。合三絃本調子シテちりていろかもなきたまの。ありかをたづねみちやうこんかきよく

なれざを。さしてはるばる行く船に。ワケ方士はなみのうきねする。ワケとこよのくにゝ來て見れば。ワケ樓閣玲瓏として。五雲おこれり。シテうちになまめくめの童。ことにすぐれて玉眞の。ツレすがたはいづれ李花一枝。あめをおびたるそのけはい。ワケ見るよりそれとことのはも。涙こぼれてらんかんを。ツレひたすもいかになれそめし。合ツレりさんのむかしおもひやる。三三紋下リあらなつかしの都人。シテはづかしながらありしよの。そのむつごともきえはつる。ワキつゆのちぎりのうさはらし。

いうて見よならひとかたに。ワケおぼしめすかやふかき江に。春のこほりのうすきはいやよ。ワケ思ひあふよはうちとけて。シテねみだれ髪をそのまゝに。とりつくろはぬ女氣を。巾三律下ルツレかはいがらんせからすばの。いろにこの身をそめ糸の。むすびめかたきかたらひも。えんつきぬればいたづらに。またこのしまにかへり來て。猶なつかしきいにしへを。思ひいづればあはれなる。そよや霓裳羽衣のきよく。樂六、一律上ルまれにぞかへす乙女子が。六、一律下ルシテ袖うちふりし心しりきや。さるにても。

ちやうこんかきよく

君には此世あひ見むこともよもぎがしまつどり。うきよなれども戀ひしやむかし。こひしやむかしのものがたり。つくさば月日もうつり。まひのしるしのかんざし給はりて。都にかへる家づとは。ふみにもまさる文月の。なぬかのよはのさゞめごと。比翼連理も今ははや。かれがれなりしうきちぎり。シテあめのとこしなへなるも。つちのひさしくふりぬるも。つくるときありこのうらみ。ッレめんくうらくとしてたえまなく。いまにのこせし筆のあと。

葵の上

琴 雲井調子 琴 三絃 三下リ 三絃 一 合

シテ三ツの車にのりのみち。火宅うちをや出でぬらむ。ッレ夕がほのやどのやれ車。やるかたなきこそかなしけれ。うき世はうしのをぐるまの。めぐるやむくいなるらむ。めぐるやむくいなるらむ。シテおよそりんゑは。くるまのわのごとく。ッレ六趣四生を出でやらず。人間の不定ばせをはうまつの世のならひ。きのふの花はけふのゆめと。おどろかぬこそおろかなれ。合身のう

あふひのうへ

きに。人のうらみのなほそひて。わすれもやらぬわが
おもひ。せめてやしばしなぐさむと。あづさのゆみに
怨霊の。シテこれまであらはれ出てたるなり。合ツレあら
はづかしや。いまとても。しのびぐるまのわがすがた。
月をばながめあかすとも。月には見えじかげろふの。
あづさのゆみのうらはづに。立ちよりうきをかたら
む。シテあづさのゆみのおとはいづくぞ。斗二律合上ル（六二律上ル片岩戸調子）あ
づまやの。ツレもやのつまどにゐたれども。合すがたな
ければとふ人もなし。合六二律下ル ふしぎやな。たれとも見

えぬ上臈の。やぶれ車にめされたるに。あを女房とも
おぼしき人の。牛もなき車のながえにとりつき。さめ
ざめとなき給ふいたはしさよ。シテもしかやうの人に
てもや候らむ。ワケ大方はすゐりやう申して候。シテ唯つ
いまず名を御なのり候へ。ワケそれ婆婆電光のさかひ
にはうらむべき人もなく。かなしむべき身もあらざ
るに。いつさてうかれそめつらむ。斗二律下ル 三絃本調子 ツレ只今あ
づさのゆみのおとにひかれて。あらはれ出たるをば。
いかなるものとかおぼしめす。これは六條の。ワケ御息

所の御れうなり。シテわれよにありしいにしへは。雲上の花の宴。春のあしたの御遊になれ。ワケ仙洞のもみぢの秋の夜は。月にたはぶれ色香にそみ。ツレはなやかなりし身なれども。シテおとろへぬればあさがほの。ひかげまつまの有様なり。合ツレたゞいつとなきわが心。もの うき野べのさわらびの。シテもえいでそめし思ひの露。ワケかゝるうらみをはらさむとて。これまであらはれ出でたるシテなり。おもひしらずや世の中の。なさけは人のためならず。我人のためつらければ。かならず

身にもむくゆなり。ツレ何をなげくぞ。シテ葛の葉の。ワケうらみはさらにつきすまじ。八、一律上ル 斗一律上ル あらうらめしや。今はうたてはかなひ候まじ。シテあらあさましや。六條の御息所ほどの御身にて。うはなりうちの御ふるまひ。いかでさることの候べき。只おぼしめしとまりたまへ。ワケいや。いかにいふとも。今はうたてはかなふまじと。まくらに立ちより。ちやうとうてば。シテ此上はとて立ちよりて。ワケわらはゝあとにてくをみする。いまのうらみはありしむくい。シテしんいのほむらはワケ身

をこがす。シテおもひしらずやワケおもひしれ。ッレうらめしの心や。（八、一律下ル　斗一律下ル）あらうらめしのこゝろや。人のうらみのふかくして。うきぬになかせたまふとも。いきて此世にましまさば。水くらき澤邊のほたるのかげよりも。ひかるきみとぞちぎるらむ。（合シテ）わらはゝよもぎふのッレもとあらざりし身となりて。はずゑの露ときえもせば。それさへことにうらめしや。ワケゆめにだにかへらむものを。わがちぎり。ッレ昔語になりぬれば。なほも思はますかゞみ。そのおもかげのはづかしや。枕にたてるやれぐるま。うちのせかくれゆかうよ。うちのせかくれゆかうよ。

奥手事物

茶の湯おんど

琴平調子 三絃六下リ 琴一 三絃一合

前弾シテ 世の中に。ッレすぐれて花は吉野山。紅葉はたつた
茶は宇治の。都のたつみそれよりも。合ワキ さとはみや
このひつじさる。合シテ すきとはたれが名にたてゝ。濃
茶のいろの深緑。ワキ 松の位にくらべては。シテ かこひと
いふもひくけれど。なさけはおなじ床かざり。合ッレ か
ざらぬむねの裏おもて。帛紗さばけぬ心から。きけば

おもはく違棚。合 あうてどうして香箱の。柄杓の竹は
すぐなれど。そちは茶杓のゆがみもじ。手事 琴八、一律下ル九、二律上ル片雲井
調子三絃三下リ うさをはらしの初音。ワケ むかしばなしのぢゝ
ばばと。ワケ なるまて釜の中さめず。合ッレ えんはくさり
のすゑながく。千代よろづ代へ。

都の春

琴半雲井調子 三絃本調子 琴一 三絃一合 山勢 作

前弾シテ 殘るくまなくさはりなく。光りかがやく朝日か
げ。ッレ かもの川風のどかなる。都の春になりぬれば。野

山の草木おしなべて。合花咲きにけり白妙の。不二の高根もみちのくも。つもりし雪の名殘なく。合とけて流るゝ河水の。行末廣き難波がた。浪路のどけき四方の海。よせくる舟のうちつどひ。合ノ半ニテ入一律上ル入下リ後ニ巾三律上ル八、一律上ル九、二律下ル巾三律下ル平調子三絃二上リめぐみも深き大君の。豐なる世に立ちかへり。萬代うたふ聲ぞたえせぬ。よろづようたふこゑぞたえせぬ。

名所土產

琴雲井調子　琴三絃本調子　三絃一合

水無月の。ツレはつたびごろもきて見れば。こゝはすみよしあをによし。ならざかこえて夕暮の。空もしづかに寂滅爲樂とつげわたる。合これぞ名におふ大佛の。かねごともれてたかまどの。よそにうき名やたつた山。三輪の山路をもすそのいとの。合いとゞふるさと春日野の。やしろにしばしこの手をば。あはせ鏡のそこきよく。あれあれ南に雲の峯。あつさしのぎの三笠山。合月の七瀨のあすか川。かはるやゆめの數そひて。名所めいしよの都のたつみ。宇治の川づら詠むれ

ば。合三絃三下リ　をちにしろきは岩こすなみか。さらせるぬのか。ゆきにさらせるぬのにてありそろ。合しづのめが。はぎもあらはに合よそねじま。なれし手わざに玉ぞちる。浪のうねうねしら玉ぞちる。手事三絃本調子　あらおもしろのけしきやな。あら面白の景色やな。我も家路にたちかへり。つとにかたらむ。花のいへづとにかたらむ。

末の契

琴雲井調子　琴一　三絃三下リ　三絃一合

シテしらなみの。ツレかゝるうき身としらでやは。若に見るめをこひすてふ。なぎさにまよふあまをぶね。合いつしづみつよるべさへ。合あらいそつたふあしたづの。なきてぞともに合たつかゆみ。はるを心の花と見て。わすれたまふな。かくしつゝ。八千代經るともきみまして。心のすゑをちぎりたがふな。

東獅子

琴半雲井調子　琴一　三絃本調子　三絃一合

シテ昔より。ツレいひならはせし。東くだりの豆男。したふ

たびぢや松がえの。合ふじの高根にしろたへの。合花のすがたに吉原なまり。きみが身にそふぼたんになれて。おのがふうきを花とのみ。やだけ心もにくからず。合思ひおもふ千代までも。なさけに合かはすきぬぎぬの。合絲竹に心みだれがみ。合うたふこひぢにつゆそふ春もくれ竹や。かぞふ扇にうつす曲。手事半ニテ琴平調子三絃二上リはなやかに。みだれみだるゝいもせのみちに。しゝもあそびていくよまて。合かはらぬ世こそめでたけれ。

嵯峨の春

琴雲井調子　琴一　三絃本調子　三絃一　合

シテこそ見にし。ツレ彌生なかばのさがの春。嵐の山の山櫻。色香妙なる花の宴。ちりてものこる心の花に。合おもひみだるゝうき身にも。まだくりかへすこの春も。くむやいづみの大堰川。うかむいかだのゆくすゑは。人の手いけとなる花を。うらむやおのがまよひをも。はらふはのりの御ちかひ。合三絃三下リ嵯峨のてらでら。まはらばまはれ。水車のわのりせむ。せきの川浪。合川柳

はみづにもまるゝふくら雀は竹にもまるゝ。都のうしは車にもまるゝ。茶臼はひき木にもまるゝ。手事三絃本調子

我は色香にもまれもまれて。玉の緒も。たえぬばかりの思川。合とこにふちなす夜半のきぬぎぬ。

さらし

琴片雲井調子　三絃本調子　琴一　三絃一　合

シテ槇のツレ島にはさらす麻布。賤がしわざに。合宇治川の。浪か雪かと白妙に。いざたちいでゝ布をさらさう。

八、一律合上ル　かさゝぎのわたせる橋の霜よりも。さらせる布にしろみありそろ。合なうなう山が見えそろ。朝日山に霞たなびくけしきは。たとへするがの富士はものかは。富士はものかは。九、二律下ル合上ル　斗一律上ル　九、二律合上ル　小島がさきによる浪の。小島がさきによる浪の。月の光をうつさばや。月の光をうつさばや。九下ル合九上ル　見渡せば。みわたせば。伏見竹田に淀鳥羽も。いづれおとらぬ名所かな。合立つ波は。たつなみは。瀬々のあじろにさへられて。ながるゝ水をせきとめよ。流るゝ水をせきとめよ。九下ル手事半ニテ九上ル後ニ斗下ル　ところがらと

てな。ところがらとてな。布を手ごとにまきのさと人。
うちつれてもどらうやれ。しづが家へ。

岡康碪

琴平調子　三絃本調子　琴三合　三絃一合

月の前の砧はッレ夜さむをつぐる。雲井の雁は琴柱
シテ
にうつして面白や。手事半ニテ九、一律上ル…九一律下ル斗一律上ル六、一律上ル六下ル後ニ斗下ル夜半
の砧のしぐれの雨と。夜半の砧のしぐれの雨と。うち
つれだちて。けふのあそびは。

四段砧

琴　平調子（低調子）

・

松竹梅

琴半岩戸調子ニテ三ヲ一律上ル琴四合　三絃二上リ　三絃一合

前弾シテ
たちわたるッレ霞をそらのしるべにて。のどけき
ひかりあらたまの。合春立つけさは足曳の。山路をわ
けて大伴の。合みつをにきなくうぐひす。合南よりわ
らひそむ薫にひかれ。聲のうらゝか。合はかぜにちる
や花の色香も。なほしはえある此里の。なにはゝ梅の
名どころ。三絃三上ル合六斗二律下ル半雲井調子三絃一上ル本調子君が代は。にごらてた

しょうちくばい

えぬみかは水。すゑすみけらし國民も。げにゆたかなるよつのうみ。合千歳かぎれる常磐木も。いま世のみなにひかれては。幾世かぎりもあらしふくおとも。合枝も榮ゆる若みどり。おひたつ松に巣をくふ鶴の。久しき御世を祝ひまふ。手事三段初段ノ半ニテ八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ秋はなほ。月の景色もおもしろや。梢々にさすかげの。ふしどにうつる夕まぐれ。そともは虫のこゑごゑに。合かけていくよのあきになく。ねをふきおくるあらしにつれて。そよぐはまどのむらたけ。

根引の松

三翠半岩戸調子ニテ三ヲ一律上ケ巾ヲ三律上ル二絃上リ　翠四三絃一合

前彈シテ神風や。ツレ伊勢の神樂のまねびして。をぎにはあらぬ笛竹の。合音もさいばらに吹きをさめばや。手事翠六、二律下ル三絃一上ル三下リ難波津の。なにはづの。あし原にのぼる朝日のもとにすむ。谷野の鶴の聲々を。合琴のしらべにきゝなして。手事巾三律下ル斗二律下ル三絃本調子軒端にかよふ春風も。ふきやみやうがのめでたさに。のもりが宿のかど松は。老いたるまゝに若緑。代もらゝかになりにけり。手事二段八、一律上ル九、

ねびきのまつ

二律下ル平調子三絃二上リ そもそも春のとくわかに。まんざい祝ふ君が代は。合よもぎがしまもよそならず。秋津洲てふ國のゆたかさ。

西行ざくら

琴片雲井調子琴一三絃本調子三絃一合

シテ九重に。ツレ咲けども花の八重櫻。幾夜の春をかさぬらむ。しかるに花の名高きは。まづはつはなをいそぐなる。近衛殿の糸櫻。合見渡せば。柳櫻をこきまぜて。都は春の錦さんらんたり。ちもとの櫻を植ゑおき。そのいろを所の名にみする。千本の花ざかり。合雲路や雪に殘るらむ。合毘沙門堂の花ざかり。四王天の榮花も。これにはいかでまさるべき。うへなる黒谷下河原。むかし遍照僧正の。手事半ニテ斗二律上ル後ニ斗下ル八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ うき世をいとひし花頂山。鷲のみ山の花の色。かれにし鶴の林まで。思ひ知られてあはれなり。合清水寺の地主の花の。松吹く風の音羽山。手事半ニテ六、一律上ル七、二律下ル九、一律上ル後ニ九二律下ル三絃三下リ こゝは又嵐山。戸無瀬におつるたきつなみまでも。合花は大井川。いせきに雪やかゝるらむ。

若菜

琴平調子　琴三絃二上リ　三絃一合

シラ年はまだ。合ツレいくかも合たゝぬさゝ竹に。合けさ
合そよさらの春風を。われしり顔に鶯の。百よろこび
の音をたてゝ。合うたひつれだち。乙女子が。つむやち
とせの初若菜。合ノ半ニテ六、一律下ル六、一律上ル七、二律下ル斗一律上ル七、二律上ル後ニ斗一律下ル若菜つ
む手のやさしさに。梅が枝にさへづるもゝちどりの
聲そへば。色さへ音さへめでたき。

松陰の月

琴半雲井　琴三絃本調子　琴三絃一合

前弾シテ軒端の松にツレ秋風の。合音も淋しくふくる夜に。
合かゝる心のうき雲を。吹きはらひつゝ澄みのぼる。
合月のみかげぞあきらけき。手事三段二段目ニテ八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ
うきをなぐさむかたみとて。合松のあらしを琴の音
にして。

替手八千代獅子

琴雲井調子　琴三絃三下リ　琴三絃一合

替手四段砧

琴雲井調子　琴本手ノ三ト替手ノ一ト合

しよういんのつき　かへてやちよじし　かへてよだんきぬた

京風物

夕顔

琴平調子 三絃二上リ 琴三絃一合

シテすむや誰。ツレとひてや見むとたそがれに。合よする車の音信を。合絶えて床しき中垣の。すきまもとめてかいま見や。合かざす扇にたきしめし。合空だきものゝほのぼのと。ぬしは白露光をそへて。合手事いとゞはえある夕顔の。花にむすびしかりねのゆめの。さめて身にしむ夜半のかぜ。

新道成寺

琴平調子 三絃二上リ 琴三絃一合

シテ花のツレほかには松ばかり。くれそめて鐘やひゞくらむ。くれそめて鐘やひゞくらむ。ひゞくらむ。合鐘に恨は數々ござる。まづ初夜の鐘をつくときは。合諸行無常とひゞくなり。合後夜のかねをつく時は。合ぜしやう滅法とひゞくなり。晨朝のひゞきには。生滅滅已入相は。寂滅爲樂とひゞけども。われは後生の雲はれて。眞如の月を詠めあかさむ。合道成卿はうけたまはし

り。合はじめて伽藍立花の。合道成興行の寺なればと
て。道成寺とは名付けたり。合山寺の春の夕暮來て見
れば。合入相の鐘に花やちるらむ。合入相の鐘に花や
散るらむ。合さるほどに。さるほどに。寺々の鐘。月落鳥
ないて霜雪天にみちしを。ほどなく日高の寺の江村
の漁火。愁にたいして人々眠れば。よきひまぞとて。立
ち舞ふやうにねらひよつて。つかむとせしが。思へば
このかねうらめしやとて。りうづに手をかけ飛ぶか
と見えしが。引きかつぎてぞうせにける。

楫枕

琴片雲井調子　琴三絃一合
三絃本調子

シテからろおす。ツレ水の煙のひとかたに。なびきもやら
ぬ川竹の。うきふししげき。しげきうきぬの泊り船。合
よるよる身にぞおもひしる。浪かなみだか苫もるつ
ゆか。ぬれにぞぬれしわが袖の。しほるおもひをおし
つゝみ。流れ渡りにうかれてくらす。心づくしの楫枕。
手事八、一律上ル九、二律下ル平調子三絃二上リ　さし
よるべはきしの上の松のね。かたきちぎりをば。せめ

かぢまくら

てたのまむたのむは君に。合心ゆるして君が手に。合
むすびとめてや。千代よろづ代も。

磯千鳥

琴平調子 三絃二上リ 琴三絃一合

シテうたゝねの。ツレ枕にひゞくあけの鐘。合げにまゝな
らぬ世の中を。なにゝたとへむ飛鳥川。合きのふのふ
ちはけふのせと。かはりやすきぞかはるなと。契りし
こともいつしかに。合身はうき船のかぢをたえ。今は
よるべも白浪の。手事曙調子 三絃三下リ 三絃本調子 棹のしづくか涙

の雨か。ぬれにぞぬれしぬれ衣。合身にしむけさの浦
風に。わびつゝやなく磯千鳥。

四季の詠

琴平調子 三絃二上リ 琴三絃一合

シテ梅のツレにほひに柳もなびく。春風に。もゝの彌生の
花見てもどる。ゆらりゆらりとゆふがすみ。春の野が
けにせりよもぎ。合つみかけたるおもしろさ。合さと
の卯の花たのものさなへいろ見えて。しげる若葉の
かげとひゆけば。まだき合はつね。やま斗一律上ルほとゝぎ

す（九、二律上ル）ひと聲に。（合六、一律上ル）花のなごりも。（九、二律下ル）わすられて。いへづとにかたらばや。（手事半ニテ斗下ル六下ルチラシニテ斗上ル爲下ル六上ル七下ル中空調子）

（三絃三下リ）草葉いろづき野菊も咲きて。（合）秋ふかみ。野邊の朝風つゆ身にしみて。ちらりちらりと村時雨。よしやぬるともみぢ葉の。そめかけたるおもしろさ。（合）野の邊のかよひぢ人目も草も。冬がれて。（合）落葉しぐるゝこがらしの風。みねのすみがま煙もさむく。（合）降る雪に。野路も山路も白妙に。見わたしたるおもしろさ。

里の曉

（琴三絃二上リ平調子琴三絃一一合）

シテあづさゆみ。ツレいるかたゆかし夕月の。（合）にほへる春もたち花の。（合）夏來にけらしひと聲は。（合）山ほとゝぎすなきすてゝ。（合）あやめもしらぬうば玉の。（合）やみよを照らす螢火の。（合）そのかげさへもかげろふの。（合）たちまさりたるおもひぬの。なき玉かへす（手事）もろこしの。そのふることのしのばれて。（合）そらだきならぬ煙のすゑは。（合）たへにかをりし雲のはの。いづちゆくらむ。みじかよのそら。

宇治めぐり

琴片雲井調子 琴三絃一合 三絃本調子

萬代をツレつむや茶園のはるかぜに。ことぶきそへて佐保姫の。賑ふ袖の若緑。人目をなにと初むかし。合霞をわけて青山の。小松のしろや綾の森。ちとせさはりもなしむしに。合よはひえいせぬばゝむかし。合誰にも年をゆづり葉の。合千代の緑の松の尾の。神代のすゑの後むかし。合ひかりをそへて園の梅。なをしら梅のいろ香にも。合ふかくぞうつる川柳。湖水こすだに宇治のなみ。

（手事半ニテ八、一律上ル斗一律上ル爲二律下ル九、二律下ル平調子三絃二上リ）

初花見する山吹の。花たちばなのにほふて。夢をむすぶのをりたかや。小鷹の爪にえだしめて。合こかげもおほき一森の。きせんのいほの松の峯。瀧のおとをも

（手事六上ル七下ル斗上ル爲下ル中空調子三絃三下リ）

菊水の。朝日山の葉薄紅葉。たか尾の峯にかりがねの。あさるこゑごゑ笠どりの。合かずまんどころおもしろや。合心をすます老らくは。合いはひのしるとうたふ舞ひづる。

七小町

琴片雲井調子　琴一　三絃本調子　三絃一合

シテまかなくに。ツレなにを種とて浮草の。なみのうねうねおひしげるらむ。合草紙洗も名にしおふ。その深草の少將が。もゝよかよふもことわりや。ひのもとならばてりもせめ。さりとてはまたあめがしたとは。下ゆく水のおほさかの。合八、一律上ゲ九、二律下ゲ平調子三絃二上リいほりに心關寺の。うちも卒都婆もそてつまを。ひくてあまたのシテむかしは小町。合ツレいまははづかし。いちはらの。合こせきもきよき合清水の。大悲のちかひ合かゞやきて。手事半ニテ六斗ヲ一律上ゲ…六斗ヲ一律下ゲ…六ヲ一律下ゲ…六ヲ一律上ゲ七爲ヲ二律下ゲ(中空調子)三絃一、二律上ゲ(三下リ)くもりなき世の雲の上は。ありしむかしにかはらねど。みしたまだれのうちやゆかしき。うちぞゆかしき。

新青柳

琴片雲井調子　琴一　三絃本調子　三絃一合

されば都の花ざかり。大宮人の御遊にも。秋菊の庭の面。よごとの木かげ枝たれて。合くれに數あるくつのおと。合やなぎ櫻をこきまぜて。合にしきをかざるもろ人の。はなやかなるやこすのひま。もれ來る風のに

ほひきて。合手事てがひのとらの引づなも。長き思にならの葉の。そのかしは木もおよびなき。戀路はよしなしや。これは老いたる柳のいろのかり衣や。かざをりも。手事風にただよふあしもとの。合たよ〳〵としてなよやかに。立ちまふふりの面白や。實にゆめ人をうつゝにぞ見む。實にゆめ人をうつゝにぞ見る。

新高砂

琴雲井調子ニテ四ト同音ニ一ヲ二律下ル

シテたかさごや。ワケこのうら船に帆をあげて。月もろと

もにいで汐の。合波のあはぢの島かげや。手事とほくなるをの沖すぎて。はやすみの江に着きにけり。合はやすみの江につきにけり。

千鳥曲

琴古今ノ調子四ト九ヲ雲井調子ニ上ル

前彈樂シテ鹽の山。ツレさし出のいそにすむ千鳥。合君が御代をばやちよとぞなく。合きみがみよをば八千代とぞなく。手事淡路島かよふちどりのなくこゑに。合いくよねざめぬ須磨の關守。合いくよねざめぬすまのせ

きもり。

春の曲

琴 古今ノ調子

前弾樂シテ鶯の。ッレ谷よりいづる聲なくば。春くることを
たれかしらまし。合深山には松の雪だにきえなくに。
合都は野邊のわかなつみけり。合世の中にたえて櫻
のなかりせば。合春の心はのどけからまし。合駒なべ
ていざみにゆかむふるさとは。雪とのみこそ花はち
るらめ。樂初段古今ノ調子二段八、一律下ゲ巾三律上ゲ九ト合セ三段古今ノ調子我宿にさける藤浪

たちかへり。合すぎがてにのみ人の見るらむ。合聲た
えずなけや鶯ひとゝせに。合ふたゝびとだに來べき
春かは。

秋の曲

琴 古今ノ調子

前弾樂シテきのふこそッレ早苗とりしかいつの間に。稻葉
そよぎて秋風の吹く。合久かたの天の川原の渡守。君
わたりなばかぢかくしてよ。合月みればちゞにもの
こそかなしけれ。合わが身ひとつの秋にはあらねど。

合 山里は秋こそことにわびしけれ。合 鹿のなく音に目をさましつゝ。樂 六斗二律巾三律上ル手事チラシニテ斗巾六下ル ちらねどもかねてぞをしき。紅葉ははいまはかぎりの色と見つれば。合 秋風のふきあげにたてる白菊は。はなかあらぬか浪のよするか。

五段砧

琴 平調子(低調子)

シテ花はよしのよ。ッレ紅葉は高雄。松はからさき霞は富山。いつもときはのふりはさんさ。しほらしや。とにかくおもはるゝ。合 砧三段ノ半ニテ六斗一律上ル 合四段ノ始メニテ六斗下ル 松は常磐よ。まつはときはよ。いつもかはらぬ歳のはごとに。

雪中竹

琴 半岩戸調子ニテ巾三律上ル(高調子)

前彈シテこの上に。合 ッレいくへふりそふ雪ならむ。合 たかむら高くなりまさりつゝ。合 よの程のあらしはたえてくれ竹の。八上ル三上ル 雪しづかにもあくるそらかな。手事 ふりつもるまがきの竹のしら雪に。合 世のさむけさを思ひこそやれ。合 かぎりなき君がちとせもこもるら

みくにのほまれ

む。合竹のはやまにふれるはつ雪。

御國の譽

平調子ニテ六、斗四、九ヲ一律上ゲ爲巾ヲ二律上ゲル

前彈樂シテ神の代の。ッレ光かはらて日の本の。ッレ合げにありがたき大君の。合むかしにかへるまつりごと。合ひなも都もあきらかに。合をさまる御代の秋津國。合水と魚との君と臣。手事三段こと國かけてまじはりも。合なほ年毎にひらけゆく。民ゆたかなるとよどしに。神の惠もあらはれて。國のみいつはつきせじな。シテ國の光もッレたえせじな。

替手新高砂

琴 平調子 低調子

替手五段砧

琴本雲井調子高調子本手ノ三ト替手ノ一ト合セ三段ノ半ニテ巾一律上ル八、一律上ル九、二律下ル四段ノ初ニテ八下ル巾下ル九上ル

替手雪中竹

琴平調子ニテ四、九、二律上ル雪しづかにもニテ六斗ヲ曙調子ニ上ル

替手御國の譽

琴平調子ニテ四、九ヲ二律上ル六斗ヲ一律上ル高調子

明治四十五年七月四日印刷
明治四十五年七月七日發行

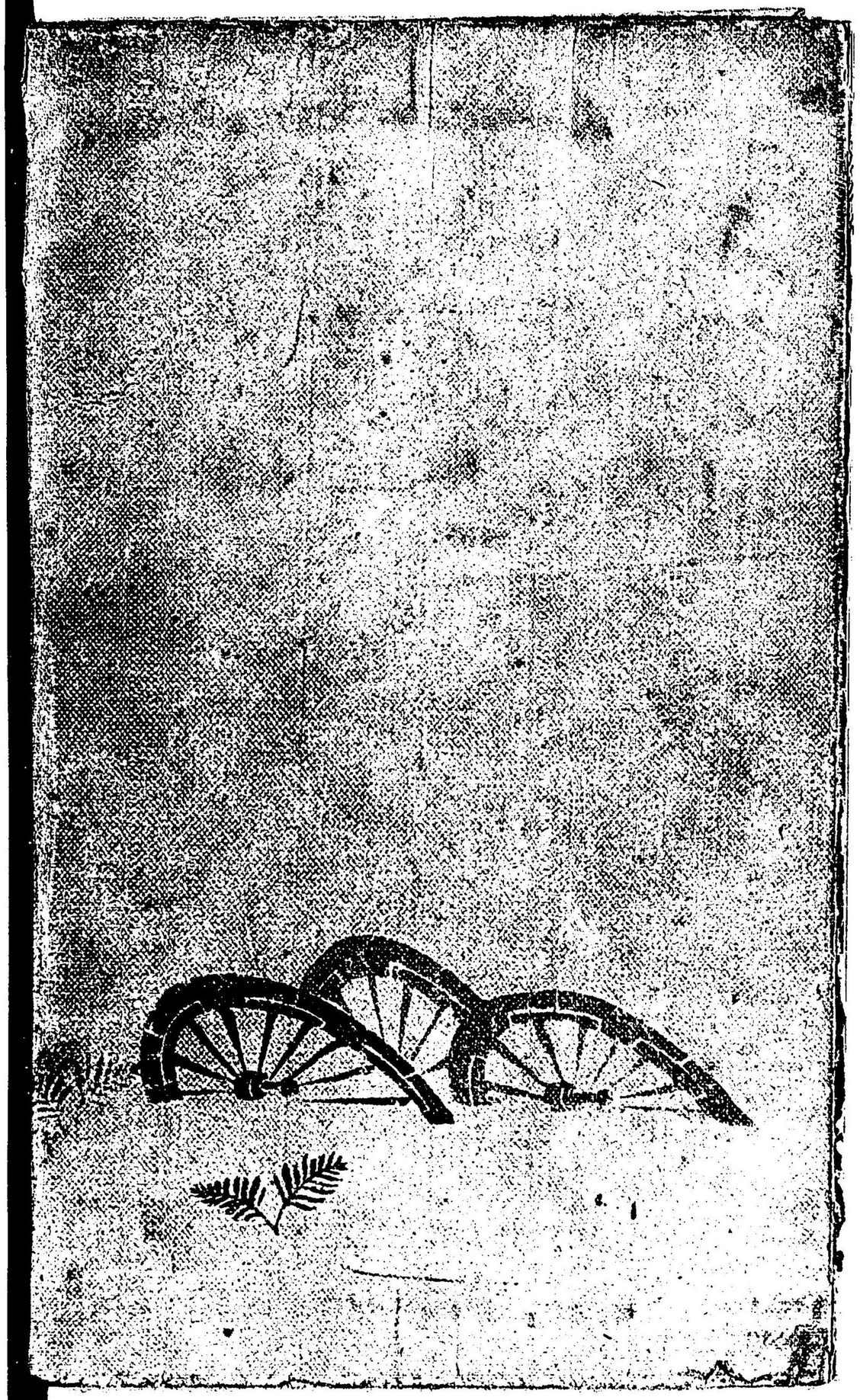
全三冊賣價金貳圓

編輯者　東京市小石川區同心町六番地　石井松清

發行者　東京市小石川區竹早町七番地　高橋市作

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　山下注連雄

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市小石川區竹早町七番地
振替東京一三八五五番　博信堂

不許複製
石井松清